

4 絵本

1. フィールドワーク実施の前提整理

(1) 絵本にかかわる大阪市の課題

大阪市が平成 19 年度に実施した「大阪市就学前児童生活実態アンケート調査結果報告書(平成 19 年度)」によると、就学前児童の絵本とのかかわりの実態は次のようにまとめられている。

絵本の保有数の平均は、約 22 冊。1冊もないと答えた家庭はごくわずかであり、子どもたちは潤沢な絵本環境のもとで暮らしている。一方、絵本を読む頻度は「毎日読む」、「週 2、3 度くらい読む」の家庭と「1 週間に 1 度くらい読む」、「あまり読まない」の家庭が半数ずつに分かれ、意識にやや落差を感じる。また、年齢があがると絵本の読み聞かせが減少する。こどもの興味のある遊びが増えたことによる絵本ばなれや、文字が読めるようになって 1 人で絵本を読もうとする姿を、養育者はこどもの成長・自立と捉えているのではないかと考えられる。しかしながら、絵本の読み聞かせには、絵本の世界を大人と子どもと一緒にイメージし、楽しむ役割がある。養育者と子どもがこうした経験を共有することは、こどもの年齢があがってもこどもの想像の世界を広げるうえで重要であり、意識して取り組むことが望まれる。

また、絵本の所有数と読む頻度についてクロス集計を取ると、次の表のようになり、絵本の保有数と読む頻度とは正比例していることが分かる。

表21 絵本の所有数

	10冊未満	10～20冊	21～30冊	31冊以上	ない	無回答	全体	平均(冊)
1歳児	213 31.7%	234 34.8%	92 13.7%	127 18.9%	3 0.4%	3 0.4%	672	16.9
3歳児	93 9.3%	299 30.0%	221 22.1%	379 38.0%	2 0.2%	4 0.4%	998	23.9
5歳児	132 10.6%	340 27.3%	249 20.0%	518 41.7%	2 0.2%	4 0.3%	1246	24.3
全体	438 15.0%	873 29.9%	562 19.3%	1025 35.2%	7 0.2%	11 0.4%	2916	

表22 絵本を読む頻度

	毎日読む	週に2、3度くらい読む	1週間に1度くらい読む	あまり読まない	読まない	無回答	全体	平均(度)
1歳児	275 40.9%	186 27.7%	72 10.7%	126 18.8%	10 1.5%	3 0.4%	672	3.9
3歳児	298 29.9%	275 27.6%	184 18.4%	216 21.6%	19 1.9%	6 0.6%	998	3.2
5歳児	230 18.5%	281 22.6%	243 19.5%	429 34.4%	59 4.7%	4 0.3%	1246	2.3
全体	803 27.5%	742 25.4%	499 17.1%	771 26.4%	88 3.0%	13 0.4%	2916	

表23 絵本の数とこどもに絵本を読む頻度の関係

		絵本を読む頻度					合計
		毎日読む	週に2、3度くらい読む	1週間に1度くらい読む	あまり読まない	読まない	
絵本の数	10冊未満	度数 80	85	85	178	33	441
		% 18.10%	19.30%	14.70%	40.40%	7.50%	100.00%
	10～20冊	度数 189	223	168	274	20	874
		% 21.60%	25.50%	19.20%	31.40%	2.30%	100.00%
	21冊～30冊	度数 133	163	114	135	17	562
	% 23.70%	29.00%	20.30%	24.00%	3.00%	100.00%	
	31冊以上	度数 402	276	155	184	17	1034
	% 38.90%	26.70%	15.00%	17.80%	1.60%	100.00%	
合計	度数 804	747	502	771	67	2911	
	% 27.60%	25.70%	17.20%	26.50%	3.00%	100.00%	

各年齢とも約2時間程度、テレビを視聴している。テレビをほとんど見ていないこどもは2%以下で非常に少なく、各家庭でのテレビ視聴の高さが伺える。年齢があがるとテレビの視聴時間が増える傾向があるが、1歳児では9%が3時間以上テレビを見ており、幼い時期から長時間テレビを見ているこどもたちがいる。

自由記述からは、1歳児では、こども自らが積極的にテレビを見ているというよりは、養育者自身がついテレビを付けっぱなしにしてしまい、それが結果的に、こどもが長時間テレビとかかわることになっている、あるいは養育者が家事をする間にこどもにテレビを見させている状況が浮かびあがってくる。

テレビの視聴時間と絵本を読む頻度との間でクロス集計を取ると、視聴時間が長くなるほど絵本を毎日読むと答える割合は減少し、逆にあまり読まない割合は増える。

表25 テレビの視聴時間とこどもに絵本を読む頻度

		絵本を読む頻度					合計
		毎日読む	週に2,3回くらい読む	1週間に1度くらい読む	あまり読まない	読まない	
テレビの 視聴時間	見ない	度数 24	12	4	7	2	49
		% 49.0%	24.5%	8.2%	14.3%	4.1%	100.0%
	30分まで	度数 73	52	24	24	5	178
		% 41.0%	29.2%	13.5%	13.5%	2.8%	100.0%
	30分～1時間	度数 240	213	100	140	13	736
		% 32.6%	28.9%	17.7%	19.0%	1.8%	100.0%
	1～2時間	度数 302	283	198	202	36	1111
	% 27.2%	25.5%	17.8%	26.3%	3.2%	100.0%	
2～3時間	度数 126	137	122	210	21	616	
	% 20.5%	22.2%	19.8%	34.1%	3.4%	100.0%	
3時間以上	度数 41	48	24	90	8	211	
	% 19.4%	22.7%	11.4%	42.7%	3.8%	100.0%	
合計	度数 806	745	502	763	85	2901	
	% 27.8%	25.7%	17.3%	26.3%	2.9%	100.0%	

(2) 実施機関のこれまでの取り組み

茨田第1保育所

課題意識

- ・日々の忙しさの中で、家に帰ると時間に追われて親子でふれあう時間がもちにくく、子どもがDVDやビデオ・テレビなどを見て過ごしていることが多い。また、保護者自身、絵本に興味がないわけではないが、親しみが少なく、どんな絵本を子どもに与え、どのように読んであげたらいいのかわからないという状況も見られる。少しの時間でも絵本を通して親子のかかわりが深められるよう取り組みたい。

過去3年間の取り組み

《地域子育て支援センター》

- ・親子教室で、図書館の館長に絵本の紹介や子育て中に読み聞かせをしたときの感想などを話してもらったり、ボランティアが読み聞かせをする。
- ・あそびのひろばで、保育士が絵本の読み聞かせをする。
- ・絵本の入れ替えをする。

《保育所》

- ・各年齢に応じ子どもが好きな絵本を紹介し、保護者の希望による購入を代行する。
- ・平和の集いの取り組みの一環として、保護者に掲示して紹介する。
- ・絵本を元にペープサートやパネルシアター・大型絵本などを、保育士が作成して見せる。
- ・図書館の絵本の貸し出しやボランティアに読み聞かせを依頼する。

都島乳児保育センター

課題意識

- ・絵本の貸し出しを週に1度行っているが、なかなか保護者に浸透しない。時間帯もあるのか決まった保護者は時々来てくれるが、毎回5組程度しかいない。
- ・パネルシアターや大型絵本の読み聞かせなどを行うことを、事前に伝えても参加する保護者が少ない。どうすればもっと興味をもち、絵本に親しむ機会をもっていただけるのか知りたい。
- ・テレビはじっと見るのに、絵本は座って聞けない子どもも多いように感じる。

過去3年間の取り組み

- ・3年前に養育者向けに絵本コーナーとして週に1度、夕方の16時から18時の2時間開放し、貸し出しもできる部屋を設ける。

光源寺幼稚園

課題意識

- ・生きる力の低下が著しい昨今。子どもたちが抱える苦しみは、ただ温かく抱きとめられるだけの無償の愛に満たされていないからだとされている。
- ・すぐれた絵本には、親子の心の架け橋になる力がある。親が子どもに生の声で読み聞かせを行うことで、子どもは親の愛情を実感し、心が穏やかになることは昔から知られている。
- ・また、絵本を楽しむことにより、想像力や知的好奇心などがおのずと身に付く。

- ・孤立した子育てから、多くの人々の経験や知恵のある子育てへの移行をめざし、ひいてはこどもたちの生きる力を少しでもバックアップするために、このテーマに取り組みたいと思う。

過去3年間の取り組み

- ・平成16年4月より、毎月えほんだよりを発行し、優れた絵本をさまざまなジャンル別に紹介している。
- ・平成16年5月より、毎月1～2回、在園児親子、地域親子を対象にしたお話会を開催(30分程度)している。
- ・お話会終了後、1時間程度、図書館(えほん室)を親子に開放し、絵本に親しんでもらっている。絵本から表現遊び、オペレッタ遊びへとつながる活動も長年続けている。

住吉幼稚園

課題意識

- ・養育者により、絵本に対する関心度の個人差が大きい。それが、こどもにも影響しているのではないかと思われる。
- ・家庭内においても、絵本への関心を高め、「絵本好き」と思う気持ちを育てたい。

過去3年間の取り組み

- ・絵本貸し出しを行い、家庭でも絵本を読める環境づくりに努めている。
- ・保育参観、子育てセミナー、降園時などに、養育者とともに絵本の読み聞かせの機会を作っている。
- ・日々の保育で、教師による絵本の読み聞かせを充実したり、図書館の絵本の会の方に来園していただく機会を作ったりしている。

赤川幼稚園

課題意識

- ・フィールドワーク検討資料内のテーマに関する課題にもあるように、近頃のこどもたちはメディア接触の増加からか、絵本を読み聞かせてもあまり集中せず、物語への興味、関心が薄れてきているように思う。
- ・私自身幼少のころ、様々な絵本に触れ、いろんなことを感じ、たくさんの知識を得たので、その経験をこどもたちにもしてほしいのと、絵本がただ好きというだけで、私にどれだけ読み聞かせの技量があるかわからないが、声色、声量などに工夫を凝らし、こどもたちの興味を湧かせ、絵本の魅力を伝えたい。

過去3年間の取り組み

- ・1日1冊は絵本を読み聞かせるようにし、その中でこどもたちに何を伝えたいかを明確にする。こどもたちの興味のある本は、繰り返し読み聞かせ、より親しみをもたせた。園内に絵本の貸し出しコーナーも設置し、こどもたちが気軽に絵本に触れられるようにしている。
- ・教職員間で話し合う機会も設け、こどもたちに伝えたい内容の本があれば購入し、各クラスで読み聞かせ、各学年の反応を伝え合い、保育者としての技量の向上も図っている。

メリーガーデン保育園 地域子育て支援センター

課題意識

- ・親子のふれあいのために毎日1冊でも2冊でもいいので、生の声で語られる絵本の時間をとって欲しいと思う。
- ・テレビやビデオなどの一方的に流れる映像の世界から少しでも離れて、たくさんの絵本に出会い絵本の世界に親しんでほしい。お話の途中で止まったり、戻ったり、繰り返したりして、こどもに合った進め方ができ、読み手と聞き手が同じ場面で楽しさを共有し、こどもには満足感を得て心豊かになる気持ちを味わって欲しい。
- ・保護者の特技講座のお礼として絵本をプレゼントしたときに、「家に絵本が全然ないのでうれしいです」と言われる保護者がいる。うれしいと喜ばれるのに絵本が身近な物になっていないのが残念で、どうしたらもっと絵本が親子の毎日のふれあいの中で生かされるかが課題である。
- ・まずは身近な地域の子育て支援センターや図書館で保護者が絵本にふれ、楽しさを知って欲しいと思う。

過去3年間の取り組み

- ・おやこ広場で、おやつを食べる前に職員が絵本を読む。
- ・5～6組のグループに分かれ、保護者が絵本を読む。
- ・保護者の特技講座のお礼として絵本を1冊プレゼントする。
- ・有識者を招いたお話会の中で素話を聞く。
- ・センターの部屋に絵本コーナーを設ける。
- ・公園に出かけ、紙芝居を読む。
- ・手作りの大型紙芝居をつくり活用する。

2. フィールドワークの内容

(1) プログラム実施のポイント

絵本については、絵本の読み聞かせを通して、「生きる力の基礎」のうち、主に「養育者との愛着形成」と「外の世界への積極性・学びへの意欲」がはぐくまれていくことが望まれており、そのためには、

- ・養育者が絵本を好きになり、読むことを楽しいと感じる（読まなければならないのではなく、こどもと一緒に読みたいと思える気持ち）
- ・いろんな絵本に親しむ機会を提供することにより、こどもも養育者も絵本の魅力を知り、もっと読みたいという気持ちをはぐくむ。

ことが必要である。

これを踏まえて、次のフィールドワークを実施した。

主な対象	フィールドワーク	
0・1・2歳児の親子	絵本へのいざないプログラム	親子参加型で、リズムカルに身体を動かして楽しむ歌やふれあい遊びと併用して、絵本の読み聞かせを楽しむプログラムの実施
	言葉で育てるプログラム	子育てに絵本を取り入れること、絵本を通して親子のコミュニケーションを促進すること、乳幼児期の言葉の育ちをサポートすることを目的としたプログラムの実施
未就園児の保護者		こどもの言葉の育ちに即した言葉かけ、声かけ、絵本やお話を楽しむことの大切さの指導
保育者		絵本とは何か、絵本の表現方法、絵本がどのようにメッセージを伝えるのかといったことを読み解きながら、こどもたちが絵本に親しめるような読み聞かせの留意点を指導する。実践経験から身に付けた読み聞かせの技術を再確認する。
5歳児	言葉を育てるプログラム	こどもがかいた絵の内容を、こどもから聞き取り記録をとる。 こどもの説明を話に組み込み、絵をかいたこどもがそのページに登場するようストーリーを構成して、絵本に仕立てる。
保育者		ダイアロジックリーディングを用いて、こどもの語彙や考えを引き出す読み聞かせ方法の指導をする。

(2) 絵本へのいざないプログラム

(大阪河崎リハビリテーション大学リハビリテーション学部 高瀬敏幸准教授)

1) プログラム実施のポイント

本プログラムにおいて、絵本を読むポイントとして、次の点を紹介・実施する。

事前に絵本に目を通す。

読み手が気に入った本は、気持ちを込めやすい。

照れないで読む。

効果音（擬音）は練習が必要である。

効果音（擬音）は慣れるようにする。擬音はこどもの注意を引き付ける魅力があるので、絵本を読むときには擬音を効果的に活用する。何度もチャレンジするうちにだんだん上手くなる。

言葉がはっきり伝わるように心がける。

ゆっくり、はっきり、大きな声で絵本を読む。

小さい声だと語尾があいまいになりやすく、言葉が伝わりにくい。はっきりとわかりやすい口調で読めるようになったら、小さな声でも聞き手を引き付けられるようにさらに練習を重ねるとよい。

絵本を通して、こどもとのコミュニケーションを楽しみながら読む。

2) プログラムの概要

実施機関	茨田第1保育所、都島乳児保育センター	
主な対象年齢	0・1・2歳児	
プログラムの流れ	はじめのあいさつ	
	歌ってあそぼう(その1) 大きな声で歌いましょう	
	あたま かた ひざ ポン てをたたきましょう おべんとうばこのうた	ねらい: ボディーイメージ ねらい: 表現 ねらい: みたて表現
	絵本指導 実物大の動物絵本や、絵本を逆さまにしたら絵が変化する絵本、手品をテーマにした絵本など仕掛け絵本の楽しさをこどもと一緒に楽しむ	
	「サーカスがやってきた」 作・絵: よぐちたかお (福音館書店)	絵が動くので、初めて見た人はびっくり。炎が燃えるシーンでは思わず手を出しアチチチチ。こどもも大人も楽しめる絵本。
「きんきらきんのはでなやつ」 作・絵: デビット・A・カーター 訳: きたむら まさお (大日本絵画)	最近日本でも翻訳された。日本の絵本にはない大迫力と、色彩感覚にびっくりする絵本。あまりの迫力にこわがるこどももいるが、小さいこどもから大きなこどもまで楽しめる絵本。	

	ちょっとした仕掛けが楽しい 絵本「てじな」絵・文 土屋富士夫(福音館)	みんなで魔法の呪文をとええと、あら不思議。いろんなものがあらわれます。
	等身大写真の迫力を楽しむ 絵本「ほんとおおきさ動物園」写真 福田豊文 監修 小宮輝之(学習研究社)	見ただけで写真の訴える力に思わず引き付けられる。余分な背景がカットされ、写真の効果を高めている。
歌って遊ぼう(その2)		
	大きなくりのきのしたで やまごやいっけん 一本橋こちょこちょ 等	ねらい:動作模倣 ねらい:動作模倣 ねらい:感覚遊び
おわりのあいさつ		

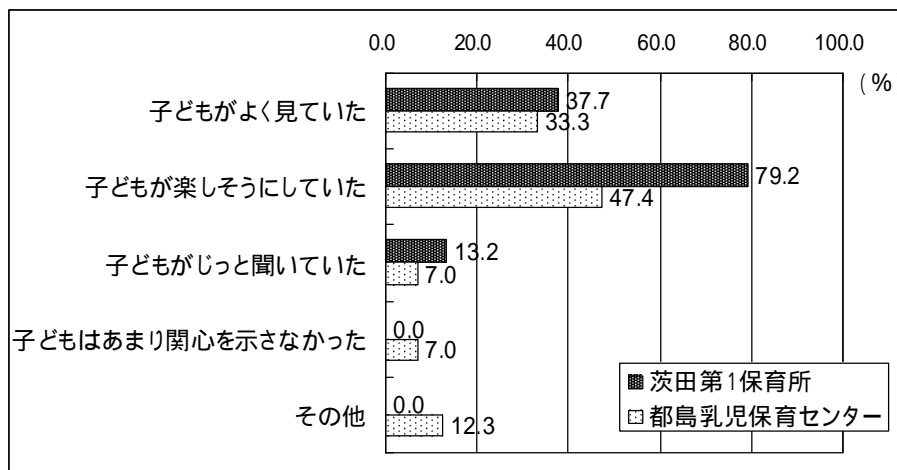
3)フィールドワーク実施結果の検証

フィールドワーク直後に養育者にアンケートを実施し、実施結果を検証した(アンケート記入者は、茨田第1保育所が53名、都島乳児保育センターは57名、計110名)。

毎日絵本を読んでいる家庭、週に2~3日読んでいる家庭の合計が、茨田第1保育所は53人中40名(75.5%)、都島乳児保育センターは57名中48名(83.9%)あり、7~8割の家庭で絵本がよく読まれている様子が伺えた。

絵本を全く読まない家庭は、茨田第1保育所で7.5%、都島乳児保育センターでは10.5%で、1割程度の家庭では、絵本を読む習慣が確立していなかった。

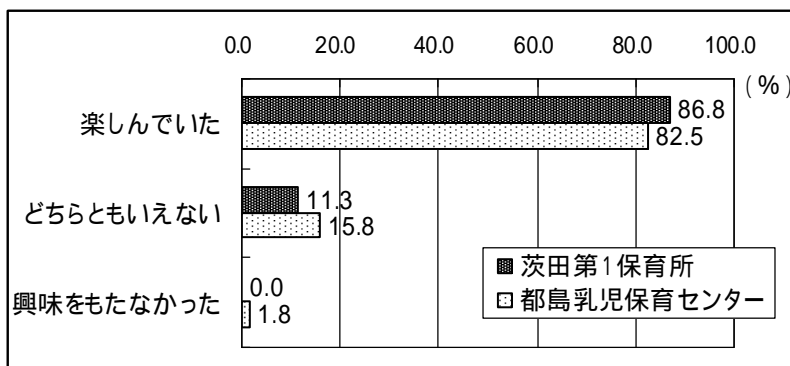
両保育所で実施した絵本指導に対するこどもの反応についての養育者の評価を述べる。茨田第1保育所では「こどもがよく見ていた」(20名、37.7%)、「こどもが楽しそうにしていた」(42名、79.2%)、「こどもがじっと聞いていた」(7名、13.2%)、「こどもはあまり関心を示さなかった」(0名、0%)という結果であった。都島乳児保育センターでは、「こどもがよく見ていた」(19名、33.3%)、「こどもが楽しそうにしていた」(27名、47.4%)、「こどもがじっと聞いていた」(4名、7%)、「こどもはあまり関心を示さなかった」(4名、7%)という結果であった。



都島乳児保育センターで、「こどもがよく見ていた」、「こどもが楽しそうにしていた」、「こどもがじっと聞いていた」の項目の数値が低く、「こどもはあまり関心を示さなかった」の項目の数値が高かった。原因は定かではないが、両保育所の絵本を読んだ部屋の環境的要因の違いが影響したのではないかと思う。両保育所の結果を総合すると、5割程度のこどもたちが絵本をまずまず楽しみ、十分に楽しんでいたこどもは3割程度いたという結果になった。

フィールドワークでは、絵本に関心を示さなかったこどもがほとんどいなかった。この結果は、養育者が取り組みさえすれば絵本の習慣を確立することが可能であるということを示唆している。

絵本以外の歌遊びなどのプログラムに関するこどもの反応に関する養育者の評価について次に述べる。茨田第1保育所では「楽しんでいた」(46名、86.8%)、「どちらともいえない」(6名、11.3%)、「興味をもたなかった」(0名、0%)であった。都島乳児保育センターでは、「楽しんでいた」(47名、82.5%)、「どちらともいえない」(9名、15.8%)、「興味をもたなかった」(1名、1.8%)であった。絵本指導プログラムと比べて歌遊びなどのプログラムの方が、こどもの反応がよかったという結果は両保育所に共通している。この結果は、今回の絵本指導プログラムが親子のコミュニケーションを豊かにする活動として歌、手遊びとともに実践された特徴が反映されたものと考えられる。



フィールドワーク事後アンケートの「絵本を読むことが好きですか?」という質問項目に「どちらでもない」、「好きではない」と答えた養育者について、プログラム実施後、養育者の絵本の読み聞かせに影響を与えるものであったかどうかを検討した。

絵本が「好きでない」又は「どちらでもない」と答えた養育者が、「絵本を読み聞かせてあげる際の参考になるようなことがありましたか?」という問いに対する自由記述は以下の通りである。

茨田第1保育所における自由記述
(絵本が好きでない、またはどちらでもない養育者による)

- ・大きさに顔・体を使って読んであげること。
- ・絵本通りのお話だけじゃなくてもいいのかなと思いました。
- ・こどもが興味をもつように読んでいた。
- ・絵本の読み方。
- ・身体も表現するとよいと思いました。
- ・いつも読む時には感情を込めて読むようにしているが、今日の先生のようにもっともっと楽しんできたいと

- 思いました。
- 興味をもたせる。
- 親も楽しく読む。

都島乳児保育センターにおける自由記述
(絵本が好きでない、またはどちらでもない養育者による)

- 声の強弱やアレンジの仕方など。
- 読むだけでなく、身振り手振りで表現すること。
- もっと感情や抑揚をつけて読むところ。
- 基本にとらわれず、楽しく読む。
- 色々な動きや音も取り入れたい。
- もっと身振り手振りでお話しをする。
- こどもの反応を見ながら、こどもにあわせて読んであげるようにしたい。
- 本の通りでなくても表現豊かに読んであげてもいいんだなと思いました。
- オーバーに読んであげると、とても楽しそう。
飛び出す絵本や動く絵本は楽しそう。
ただ読むだけでなく、動きをつけて読むこと

(は絵本を読むことが「好きでない」と答えた方である。)

自由記述の質問項目であるにもかかわらず、以上のように多くの方から意見が寄せられたことは、絵本にあまり関心をもっていなかった養育者が、今回のフィールドワークで少なからず影響を受けたことを示している。全体の回答をみると、

- 読み手である養育者が楽しんで読む。
 - いろいろ読み方に変化をつけて読んでもよいことが分かった。
 - 感情や表情・身振りなどいろんな表現があってもよいことが分かった。
- という点についての意見が多数みられた。

この結果は、「絵本の習慣がない養育者に対し、絵本への興味・関心をもっていただく場を提供する。」という今回のフィールドワークの意図が、理解されたものと評価できる。

また絵本を読むことが好きでないという方が、こどもの姿を通して「飛び出す絵本や動く絵本は楽しそう。」という感想を述べられたことは、今回の指導プログラムが養育者に絵本指導のきっかけを与えた1つの事例である。

(3) 言葉で育てるプログラム

(大阪樟蔭女子大学人間科学部 神村朋佳講師)

1) 赤川幼稚園でのフィールドワーク

プログラム実施のポイント

赤川幼稚園から提出された「課題意識」には、「こどもたちの興味を湧かせ、絵本の魅力を伝えたい」という文言が見受けられる。そこで、赤川幼稚園では、絵本とは何か、絵本の表現方法、絵本がどのようにメッセージを伝えるのかといったことを読み解きながら、こどもたちに届けるために、どのような点に留意して読み聞かせを行うか、先生方が現場での実践経験から身に付けた指導技術を再確認するよう、先生対象に絵本の読み聞かせ講座を実施した。このプログラムは、これまでに、図書館等での読み聞かせ実践講座、ブックスタートボランティア研修会等で行ってきた講義内容を元に再構成したものである。

また、養育者と園児への働きかけとして、「絵本ダイアリー」「ニュースレター」を配布した。

絵本の読み聞かせ講座の概要

対 象	幼稚園教諭
プログラムの流れ	
第 1 回目 10月18日 (土) 14:00~ 16:00	講義「絵本の読み聞かせの基本を確認する」 絵本とは何か ・絵・言葉・めくりの関わり ・表紙・見返し・扉から裏表紙まで 絵本の表現 ・絵本のめくりの効果 ・絵本の方向性・動き 絵本の読み聞かせの基本 ・こどもにとって見えやすい持ち方、めくり方 ・絵本の方向性、めくりの向き、場をつくる 課題として、次回までに本を一冊選び読み聞かせの練習をする
第 2 回目 11月29日 (土) 13:30~	実践「絵本を読み合う」 前回課題として準備してきた絵本を全員で読み合う 感想や講評を伝え合う

実践講座の内容

絵本とは何か 絵本の色々…… 物語に挿絵がついた本と絵本 写真集と写真絵本 「こどもに伝える」絵本 絵と文の関係が重要!
--

『あおくんときいろちゃん』などを用いて、閉じられめくられることで絵に動きが生まれること、絵画と、絵本の表現の違いを解説した。

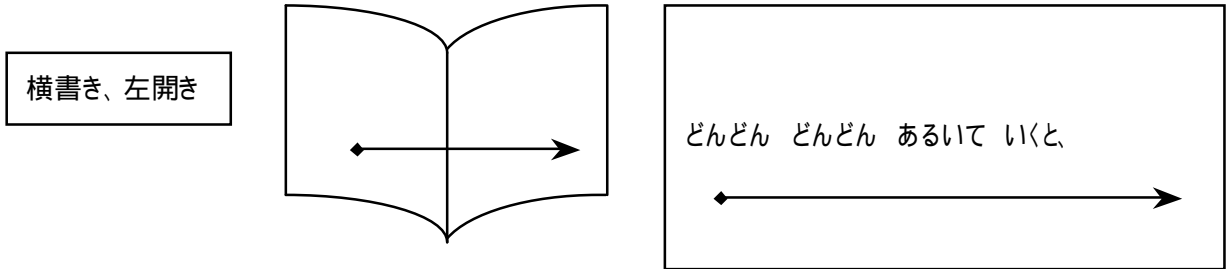
絵本は色々な部分からできている
 表紙、見返し、とびらからはじまる物語
 表紙にはじまり奥付、裏表紙まで、とことん読もう

『おおきなかぶ』の絵本は、表紙と裏表紙がつながり、最終場面が描かれている。最後にぱたんと絵本を閉じたままの状態で見返しを開けると、画面が倍の広さに広がって、最終場面となる効果がある。

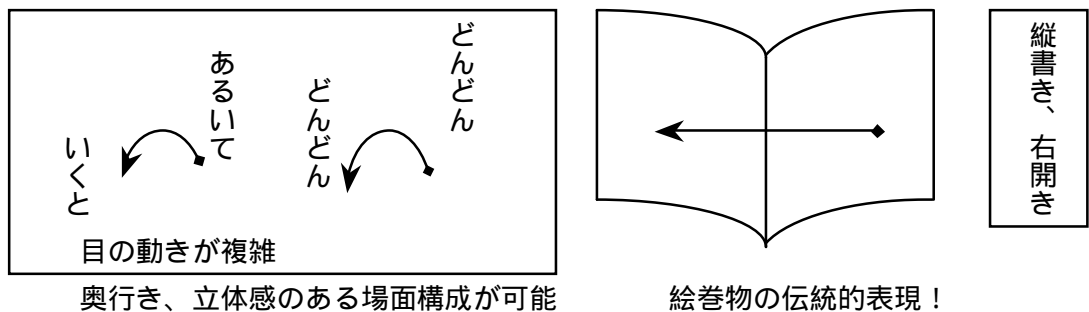
『いないいないばあ』では、扉ページでねずみがページターナーとして機能し、絵本の世界へ読者を誘う。ねずみの場面だけ、「こんどは誰だろ？」と問いかけることで、ねずみの存在を読者に意識させ、奥付ページで、退場するねずみの姿を見せる。ぱたんと本を閉じると、裏表紙でねずみが手を振っている。

見返しについては『ぼくがラーメンたべてるとき』を用いて解説した。

絵本の表現 縦？横？ 右？左？
 流れと方向性 絵の動き
 文字と絵の位置関係
 方向性から生まれる心理的な意味(『ぼくがラーメンたべてるとき』を用いて説明した。)
 日本語(縦書き)による絵本の可能性



目の動きとストーリーの流れがマッチ
 横長の画面構成



右開きか左開きにより、持ち方、めくり方が変わる！
右手で持つか、左手で持つかを確認すること！
めくるとき、ページに手がつかないように常に意識し、めくり方を工夫すること！
こどもたちによく見えるということが読み聞かせの絶対条件である！

めくる効果

めくると絵が変わる！絵本の面白さの基本
閉じることができる絵本の完結性
断片が一つになること、時間の流れが分かること
つながりながら切れる、切れながらつながる

絵本を選ぶときの留意点

絵本は絵と言葉、めくりが一体となって、繰り広げられるものであり、絵だけに頼って選ぶべきではない。
お話(言葉)と絵、めくりの関係に注目すること。
絵を「かわいい」「きれい」だけでなく、お話にあう雰囲気かどうか、デッサンや、力強さ、正確さなど、複数の観点で評価すること。
声に出して読み、言葉に合わせてめくりながら、判断すること。できれば人に読んでもらうのがベスト。
視覚的刺激が強すぎると、イメージーションを阻害したり、物語を阻害したりする場合もある。

本来耳で聞くものであった昔話を絵本にすることには、難しさがある。自由に描ける半面、お話が語っていないものを付け加えることも可能である。

昔話は作者がおらず、著作権がないため、同じ内容のお話が種類の絵本になっていることが多い。できるだけ複数を比較して選ぶこと。

お話に関係のないものは潔く省いた絵の方がお話をよく伝えることもある。(『おおきなかぶ』『こびととくつや』など。)

フィールドワーク実施結果の検証

全12名の幼稚園教諭に、講座終了後、質問紙調査を行った。講座を受けての感想では、概ね、講義内容については新鮮味がある、絵本についての興味・関心が増した、読み方が変わりそう、読み聞かせに役立つという評価であった。

自由記述からも、同様のことがうかがえる。

- ・普段、自分が気付かないことに気付けた。
- ・聞く側になったときの感覚が新たな発見になりました。
- ・知らないことがたくさんあり、すごく勉強になった。
- ・絵本に対する見方が変わりました。
- ・職員同士で読み聞かせすると、こどもの気持ちになって絵本を見ることができ、いい機会だった。

- ・絵本選びの コツ が分かった。
- ・絵本のめくり方は自分のクセがついてしまっていた。絵本の進む方向などは意識したことがなかったの
で、これから意識して読んでいこうと思った。
- ・今まで知っていたことや事前に行っていたことが様々な意味をもっているのを再確認できた。

絵本の講座を受けての感想

	大変よく 思う	まあまあ 思う	少しは 思う	全く 思わない	無回答
新鮮だった	7	3	1	0	1
実践経験を振り返ることができた	11	1	0	0	0
面白かった	8	4	0	0	0
分かりやすかった	9	3	0	0	0
絵本の読み方が変わりそう	9	3	0	0	0
難しかった	2	5	3	2	0
読み聞かせに役立つ	11	1	0	0	0
絵本についてもっと知りたい	7	5	0	0	0
絵本への興味が増した	9	3	0	0	0
絵本は難しいと感じた	4	4	4	0	0
絵本の読み聞かせに積極的に取り組みたい	10	2	0	0	0

講座の際に、直接話を聞いたところ、これまでに、絵本や読み聞かせに焦点をあてた授業や研修を受けたことがないという先生がほとんどであった。今回の講座は、初めての取り組みということもあり、絵本の読み解きの基本に絞って講義したが、「新鮮だった」7名という結果や、自由記述の「知らないことがたくさんあった」「見方が変わった」などの率直な感想からも、その点が読み取れる。幼稚園教諭や、保育士などの初任者研修や、経験を積んでからの振り返りとして、「絵本の読み聞かせ講座」の取り組みは有効であろうと思われる。

2) メリーガーデン保育園での取り組み

プログラム実施のポイント

メリーガーデン保育園は、在宅の未就園児の子育てをサポートする地域子育て支援センターとして、通所の利用者を対象として、様々なプログラムを行っている。そこで、子育てに絵本を取り入れること、絵本を通して親子のコミュニケーションを促進すること、乳幼児期の言葉の育ちをサポートすることを目的として、養育者対象にプログラムを実施した。また、親子で楽しむプログラムを実施した後、プログラム内容に沿って、こどもの言葉の育ちに即した言葉かけ、声かけ、絵本やお話を楽しむことの大切さを養育者対象に話をした。

また、絵本を子育てに取り入れる動機付けとして、本事業への参加園の事業内容の紹介として、「絵本ダイアリー」「ニュースレター」を配布した。(希望者のみ持ち帰り。)

絵本の読み聞かせ講座の概要

対 象	0歳児から5歳児までのこどもと養育者
プログラムの流れ	
第1回目 10月25日 (土)	<p>第1部 親子で楽しむプログラム</p> <p>おはようの歌 はなさかんひらいた はるかぜ ふー ここはてっくび あがりめさがりめ 『でてこいでてこい』(林明子、福音館書店) 『もこ もこもこ』(元永定正、文研出版) 『しろくまちゃんのほっとけーき』(わかやまけん、こぐま社) たまごでお料理 お話「くまさんのおでかけ」(中川李枝子作、『おはなしのろうそく』、東京子ども図書館) パペットを使って 『三びきのやぎのがらがらどん』(アスピヨルンセンとモーの北欧民話、福音館書店) くすりやのまえで さよならあんころもち</p> <p>第2部 養育者対象の話</p>
第2回目 11月17日 (月)	<p>第1部 親子で楽しむプログラム</p> <p>おはようの歌 ここはてっくび 『とってください』(福知伸夫、福音館書店) はるかぜ ふー どんぐり 『きよだいなきよだいな』(長谷川摂子、降矢なな、福音館書店) 魔法の呪文「たかずくたかずく」 『ちいさなちいさなおばあちゃん』(エルサ・ベスコフ、偕成社) 『こびととくつや~グリム兄弟の童話から』(カトリーン・プラント絵、平凡社) いとまきの歌 さよならあんころもち</p> <p>第2部 養育者対象の話</p>

= 歌・わらべ歌遊び

= 昔話に出てくるとなえ言葉を用いた遊び

第2部 養育者向けの話の概要(乳幼児対象の絵本プログラムの内容とねらい)

家庭での子育てへの取り入れやすさ、家庭での繰り返しや応用を意図して、斬新なものや奇をてらったものを避け、定評あるもの、基本となるもの、単純で親しみやすいものを中心に、質の高い絵本やお話、わらべ歌遊びでプログラムを構成した。

全体の流れ(展開)のスムーズさや季節感などに留意し、また、プログラム内の各要素の関

連付け、言葉、リズム、身体刺激、身体表現などの相乗効果により、体験を深めることをねらいとした。

1歳前後までの乳幼児対象として、音からイメージが生まれ体感に結び付く絵本、音の繰り返しやリズムを楽しむ絵本を多く取り入れた。また、0～5歳児の異年齢集団であったので、各年齢の子どもたちが楽しめることに留意し、十分に満足感を得られる内容の絵本を用意した。

以下に具体例をあげながら、プログラムの内容とそのねらいを述べて、養育者向けの話の報告にかえる。

) 伝承のわらべ歌遊びについて

乳幼児にとって、まず最初の言葉は音声であり、歌である。大人があかちゃんに語りかけるときに自然に行う motherese は、言葉が本来もっているリズムや抑揚を強調した、歌うような語りかけであり、それは乳幼児にとって、意味のある音声を識別するための重要な指標となっている。

乳幼児への言葉かけから自然発生的に生まれた伝承のわらべ歌遊びは、乳幼児をあやし、しつけるための基本的なスキルであり、子どもの言葉を育てるための重要なツールであった。大人と子どもが対面で向かい合い、目と目、声と声を合わせ、ふれあう遊びによって、何にもまして、基本的な愛着が形成され、人間関係の土台が築かれる。

伝承のわらべ歌には、日本語本来の音の感覚、語感、日本の風土に根差した自然観や季節感が豊かに謳われている。歌、言葉とリズム、身体刺激、ふれあいなどが渾然一体となって、叱る、あやす、気をそらせる、ほめる、囁す、さらには、希望や願いまでも、子どもたちに伝えることができる。

本来、単純な繰り返しの多いわらべ歌遊びを繰り返すことで、リズム、パターン、動作を伴って、言葉（意味、語感、イメージ）が定着するだけでなく、自ら音声を発する楽しさ、音やリズム、言葉を楽しみ、やりとりを楽しむ感覚がはぐくまれる。

) 目と目を合わせて、真似をして

乳児期に、最も重要なことは目と目が合うことであり、それが、言葉の育ち、コミュニケーションの育ちの土台となる。最初のわらべ歌遊びは、目と目を合わせる、向かい合い、相手の真似をするといった乳幼児期に自然に見られる動作を促し、人とのコミュニケーション（やりとり）の基盤をつくる。また、身体各所への意識を高め、操作性、巧緻性を高める。

あがりめ、さがりめ

目を上、下、一回転させる、目を合わせる（にらめっこ）

ここはてっくび

手首、手のひら、指への意識

) 季節感のある歌遊びで、体験と言葉、イメージを結び付ける

家庭での養育にすぐ取り入れることができるよう、単純で親しみやすく、季節感のある遊びを行った。発声による身体器官の動き、内部感覚と、音声、動作などが相まって、どのよ

うなイメージが広がるか、文字以前の言葉の世界（口承の世界、声の文化）の豊かさを感じながら遊びたい。

はるかぜ ふ～
春風ふ～桜の花びら ひーらひら
秋風ふ～もみじのはっぱもちーらちら

まず、「ふ～」という風の音と同時に、実際に息を吹きかけ、息でふれあう。空気の動き、くすぐったさ、涼しさ、あたたかさを感じる。「桜の花びら」で、手をひらひらさせ、「ひーらひら」でくすぐり遊び。二番も動作は同じ。あかちゃんを抱っこしたまま、片手でできるので、0歳児から。

八行音は、はらはら、ひらひら、ふわふわ、ほろほろ、ふわっ、など、空気感、浮遊感、軽やかさなどの語感をもつ。「はるかぜ」「はなびら」「ひらひら」の八行音の連なりから、桜の花びらの小ささ、軽やかさ、風に舞う様子がイメージされる。HARUKAZE FU SAKURA NO HANABIRA HIRAHIRA と、全体として、Aの母音が響き、ゆったりとした音の流れが感じられ、そこに流れる音（R）空気感のある軽い音（H、S）が挟まれて、軽やかな空気の動きに桜がはらはらと舞い散るさまが感じられる。

それに対して、二番は、アキ・アカルイ・アカイなどに通じる「秋」に「もみじ」のイメージが重なる。「ひらひら」と「ちらちら」は一音異なるだけで、語感もよく似ているように思われるが、「ちらちら」は「散る」に通じ、「雪がちらつく」「ちらっと見る」など、「ちら」からは瞬間、はかなさ、短さなどが感じられる。また、「ちらっ」の翻る感じから、もみじの葉っぱが表になり裏になり翻りながら落ちていく情景もイメージされる。

どんぐり
どんぐり どんぐり こーろころ どんぐり どんぐり こーろころ
ころころ ころころ こーろころ

0歳児からすぐに真似ができる単純で簡単な遊び。手をグーにして、どんぐりに見立て、体の前で音楽に合わせて転がすしぐさをする。小指、親指、最後にこぶしと変えて、小さいどんぐりから大きなどんぐりまで表現してもよい。

ころころの音の繰り返しの面白さ、「コロコロ」の、舌を転がし叩く発声の動きとともに、硬く小さいものが回転するイメージを手で表現し、体感する。

このような遊びにより、自然への感性を高めるとともに、音声、動作の相乗効果で、言葉とイメージを結び付ける。実際に、戸外で、風に吹かれながら、葉っぱの落ちる様子を見、どんぐりや葉っぱを拾い集めるなどする体験と併せて、何度も繰り返し歌い遊ぶことで、言葉と体験、イメージの結び付きが強化され、体感、体験、イメージに裏打ちされた生きた言葉が獲得される。

)音の言葉

日本語には、擬音語、擬態語など「音の言葉」が豊富である。また、いわゆる「あかちゃん語」も、非常に豊富であることが指摘されている。そして、日本の「あかちゃん語」には、「ブーブー」「ワンワン」など擬音語、擬態語をそのまま利用したものや、同じ音を重ねた「マンマ」「クック」のように、擬音語、擬態語と形の似通った言葉が少なくない。

「物の名称」が獲得されるずいぶん前に、乳幼児は、物の性質、どのように使われるのか、何をするためのものかを理解する。あかちゃんは、「ブラシ」や「スプーン」という語を獲得していなくても、その物をつかみ、頭や、口にもっていき動作をするのである。ボタンのような突起は、人間の押すという行為を促す。そのような、物に備わる性質を「アフォードダンス」というが、物と人間がどうかかわるのか、人間にとってどのような意味があるのかが、物の名前に先行するのである。

日本語の音の言葉は、乳幼児にとって、音の重なり、繰り返し、リズムの心地よさがあるだけでなく、物の性質や人間にとっての意味を伝える上で、大変重要な言葉である。『三びきのやぎのがらがらどん』で、瀬田貞二は、やぎが橋を渡る様子を「かたこと かたこと」「がたごと がたごと」「がたん ごとん がたん ごとん」と、日本語の特性を生かして訳し、やぎの大きさ、重さ、歩く様子を見事に表現した。

「ころころ」「ごろごろ」「ごろんごろん」といった音の言葉は、「ボール」という物の名前だけでは表現し得ない、何かが転がる情景、転がるものの大きさ、硬さ、形状、あるいは、転がる路面の状況などを伝える。「しとしと」「ざあざあ」は、「雨」だけでは伝えきれない情報を雄弁に伝え、「ストーブ」という名前を知らずとも、「あっちっち」と言われれば、乳幼児は瞬時に身を引くことを覚える。「音の言葉」は、耳からの心地よい刺激、大げさな抑揚やメロディーラインのメリハリ、繰り返しの音とリズムにより、乳幼児の注意を引き、重要な情報を伝えるために多用されてきたのである。

既に紹介したわらべ歌遊びの全てに、音の言葉が存分に用いられていた。また、絵本『もこもこもこ』が、いかに幼児を喚起し、0歳児を魅了するか、様々な場で、様々な年齢のこどもたちに読み聞かせてきたが、幼児、特に0歳児の集中ぶりには、度々、驚かされた。ぼかーんと口をあけて、あるいは、遊びの手をとめて、どのこどもも夢中になる絵本である。同様に、『ごぶごぶ ごぼごぼ』など、音と、音から生まれるイメージと絵とがぴたりと合い、心地よい音の流れを楽しめる絵本は0歳児に圧倒的に支持される。

)絵本と遊びの関連について

『しろくまちゃんのほっとけーき』は、身近な生活の場面を描き、絵も内容も幼児絵本として優れているが、「ぼたあーん だろだろ ぷつぷつ やけたかな まーだまだ しゅっぺたーん ふくふく くんくん はい できあがり」という音につれて、ホットケーキが焼きあがる場面は、「音の絵本」としても秀逸であり、0歳児から楽しめる絵本である。

この『しろくまちゃんのほっとけーき』と、最後に大きなホットケーキができる手遊び「たまごでお料理」、秋の木の実や葉っぱが次々と登場する絵本『とってください』と、「はるかぜ ふ〜」「どんぐり」などを組み合わせて、絵本を踏まえて、言葉から導き出されるイメージを手遊び、歌遊び、身体表現により体感した。

乳幼児対象の場合、長時間集中することは難しいため、途中で、手遊び、歌遊びなどで、適度に体を動かしたり、ほぐしたりすることが必要だが、激しく体を動かしたり、興奮を高めるような遊びは避けたい。遊んだ後で、再び、ずっと集中できるようなもの、前後の脈絡や雰囲気壊さず、お話の世界を体感し、イメージを膨らませ、広げるようなものを意識して構成している。

こどもたちは、小ささ、弱さを自覚し、小さいものに心を寄せる一方、大きなものに憧れる。『きよだいなきよだいな』は、巨大な物が次々に登場する、威勢のいい言葉の連打が爽快な絵本である。

『ちいさなちいさなおばあちゃん』は、ヨーロッパの昔話を基にした絵本である。「ちいさなちいさな」という言葉が畳み掛けられ、その繰り返しの面白さ、心地よさを楽しむうちに、だんだんと、意識が集中し、読み聞かせる声も小さく低くなっていく。最後の場面で、「ちいさいおばあちゃん」が、思いがけず大きな声を出すところで、緊張がほぐれて、ほっと笑えるお話である。絵がシンプルで、心地よい聴覚刺激が、幼児期にふさわしい絵本である。

この二冊の絵本の間に、「たかずくたかずく」の言葉を用いた遊びを入れた。この言葉は、よく知られる日本の昔話「三枚のお札」のクライマックスの場面で、山姥が唱える呪文である。ここでは、この呪文を唱えながら、実際に体を伸ばしたり、縮めたりして、体をほぐしながら、「きよだいな」と「ちいさい」の対比、「たかずく」「ひくずく」の対比を重ね合わせ、目で見て、耳で聴き、自らの体を動かすことで、楽しみながら体感した。また、皆で小さくなったところで、『ちいさなちいさなおばあちゃん』へと、導入もスムーズであった。

このような体をほぐす遊びは、精神的な集中から体の緊張を一旦解きほぐし、次の絵本に集中できる状態をつくり、言葉から生まれるイメージを体感するために行う。このような遊びは既存のものが多数あるが、あえて、少なくとも3～4歳以降が対象年齢となる昔話「三枚のお札」の呪文を用いたのは、「ブックトーク」(本やお話の紹介)や「アニメーション」(本の内容を題材としたゲームやクイズなどのアクティビティにより、本に親しみ、読み取りを深める読書支援活動)の要素をプログラムに取り入れることで、認知度や興味関心を高める試みである。

『こびととくつや』も、乳幼児にはまだ早い、クリスマス前の時期のお話であり時宜にかなうことから、4～5歳児にとって、読んでもらったという満足感が得られる本として選んだ。また、小人に洋服や靴をつくってプレゼントする内容から、「いとまきの歌」へのスムーズな導入をも意図した。「いとまきの歌」では、歌を歌うだけでなく、幼児は『こびととくつや』の物語に重ねて、小人さんの手袋や靴下を作る手遊びを行い、0歳児には、歌に合わせて、お腹、腰から、手足へと全身マッサージを行った。

) 昔話について

伝承の子育てにおいては、こどもの教育の柱は、「わらべ歌」と「昔話」であった。昔話には、「わらべ歌」と同様、こどもたちに伝えるべきことが数多く含まれている。また、本来口伝で語り伝えられてきた(声の文化、口承の文化)昔話は、耳で聞いてイメージしながら話の筋を追って楽しむものである。そのため、単純な言葉を用い、耳で聞いただけで、面白くわかりやすい独特の形式(繰り返しの多用、発端句、結末句などの特徴)をもっている。

昔話のような単純な話を繰り返し聞くことで、言葉からイメージし、楽しみながら人の話を聞く、先を予測する、結末への期待を膨らませながら辛抱強く待つ姿勢がはぐくまれる。昔話を耳で聞いた場合は、絵本とは異なり、主人公の後をぴったりついていくような感覚で物語の世界に入り込む。そのようにして、繰り返し、困難や課題をくぐりぬけてハッピーエンドに至るパターンを体にしみこませることで、自分の人生の主人公として前向きに生き抜くこと、未来を信じることの大切さが刷り込まれる。

昔話は、こどもたちが喜ぶ物語の基本的な構造、パターンを備えている。児童文学は昔話を源泉として生まれ、特に、幼児向けの絵本やお話には、昔話の影響を受けたもの、昔話のような物語の形式を踏襲したものに優れた作品が多い。乳幼児やこども向けの本を選ぶ際、昔話のような物語の形式を備えているかどうかの一つの基準となるであろう。養育者はもちろん、特に、保育に携わる大人は、きちんと再話された昔話をたくさん読み、こどもたちに向く絵本やお話を選ぶ目を養うことが必要である。

3～4歳からはお話を聞くことができるようになるので、絵本と同時に、少しずつ耳から聞く読書にも触れる機会をもたせたい。今回のプログラムでは、昔話由来であり、なおかつ、絵本としても非常に優れた作品である『三びきのやぎのらがらどん』、『ちいさなちいさなおばあちゃん』、『こびととくつや～グリム兄弟の童話から』を読み聞かせるとともに、お話を聞くことに慣れていない乳幼児に対するお話の導入として、くまのパペットを使って、「くまさんのおでかけ」という単純なお話を語った。

フィールドワーク実施結果の検証

参加者は、日頃から地域子育て支援センターをよく利用する（51.4%）、たまに利用する（37.8%）という方が多い。

また、ブックスタートを経験し（75%）、とてもよかった（44.4%）、よかった（51.9%）という感想をもち、家庭で絵本の読み聞かせをよくしている（70.3%）、本を借りたり読んだりできる場所や、「おはなし会」などへ足を運ぶなど、比較的関心が高く、参加意欲が高い方が多かったようである。

このプログラムへの参加のきっかけ（複数回答）は、「こどもと一緒にでかけられる」（80%）、「ふれあい遊びが好きだから」（70%）、「子育てのヒントを求めて」（55%）という、子育て支援センター利用に関連する項目が高く、続いて、「絵本が好きだから」（50%）となっており、子育て支援センターで実施することで、特に「絵本」への関心が高い層だけでなく、広く子育てに関する情報やサポートを求める方にアピールすることができたと言えよう。

講座に関しては「絵本の大切さがよく分かった」（84.2%）、「家庭でも取り入れてみたい」（78.9%）、「絵本や子育てについてもっと知りたい」（78.9%）といった項目でよくあてはまるという回答が高率になっており、子育てにおける絵本の意義を伝え、絵本を子育てに取り入れる動機付けとしては、効果があったと考えられる。

また、受講後の変化について尋ねた項目については、回答者が9名と大変少ないため、統計的に処理することは難しいが、以下の項目について9名中7～8名が「よくあてはまる」と回答している。

- ・子どもへの声かけ、言葉かけが増えた
- ・絵本やお話を楽しむことが増えた
- ・子どもとのコミュニケーションが増えた
- ・子どもとのコミュニケーションがとれやすと感じる
- ・家族のコミュニケーションが増えた
- ・会話に絵本の言葉や内容が出てくる
- ・子どもとかかわるのが楽しい
- ・言葉のやりとりが楽しめる
- ・子どもが安定していると感じる

大変少数の回答ではあるが、乳幼児期に、家族のコミュニケーションの中で、多様な言葉のやりとりを楽しみ、絵本やお話を楽しむことが、子どもとのコミュニケーション、子どもの言葉を育て、子育てのストレスが軽減され、育てやすさを感じるという好循環が生まれることが期待できる。

(4) 言葉を育てるプログラム

(大阪女学院大学国際・英語学部 加藤映子教授)

大阪市立住吉幼稚園及び私立光源寺幼稚園では、2つのプログラムを実施した。

ひとつは、保護者及び教諭対象の「こどもの言葉を育てる読み聞かせ」のワークショップである。このワークショップでは、「ダイアロジックリーディング」と呼ばれる手法を用いて、こどもの語彙や考えを引き出す読み聞かせの方法を指導することを目的とした。教諭対象のワークショップでは、ワークショップ前と後での比較を行うため、クラスでの読み聞かせをワークショップ前と後で行い比較した。ふたつめは、こどもが絵本に興味をもち、自ら絵本とかわることを目的として「こどもとつくる絵本」を実施した。

1) 教諭対象ワークショップ

プログラム実施のポイント

対象：各園所属の教諭全員 / 担当クラスのこどもの年齢に制限なし

目的：「ダイアロジックリーディング」を用いて、こどもの語彙や考えを引き出す読み聞かせの方法を指導する

ワークショップの概要

ステップ	概要	実施日程
1	教諭対象ワークショップ前のクラスでの読み聞かせを、右の日時で実施しビデオに収録した。	光源寺幼稚園 10月15日(水)14:00-14:30 住吉幼稚園 10月16日(木)11:00-11:30 11:30-12:00
2	ステップ1終了後、教諭対象の「こどもの言葉を育てる読み聞かせ」ワークショップを実施した(詳細は「ステップ2」参照)。また、読み聞かせについてのアンケートも実施した。	光源寺幼稚園 10月15日(水)15:00-16:00 参加教諭6名 住吉幼稚園 10月16日(木)15:00-16:00 参加教諭3名
3	ステップ1終了後、ステップ1で絵本の読み聞かせを収録した同じ教諭のクラスで、再度ビデオを右の日時で収録した。ワークショップ前と後でどのように教諭及びこどもが変化したかを見るため、同じ絵本で読み聞かせを行った。	光源寺幼稚園 10月27日(月)13:00-13:30 住吉幼稚園 11月13日(木)12:30-13:00 13:00-13:30
4	ステップ3と4で収録したビデオを分析し、教諭対象の2回目のワークショップを行った。	光源寺幼稚園 11月26日(水)15:00-16:00 参加教諭6名 住吉幼稚園 12月1日(月)15:00-16:00 参加教諭4名

<h3>子どもの読書活動</h3> <ul style="list-style-type: none">●活字離れ●国語力の低下●対話による問題解決能力の低下	<h3>活字離れ</h3> <ul style="list-style-type: none">●楽しむ読書（児童生徒）をしたことがない..... 71%●図書館で本を借りたことがない<ul style="list-style-type: none">●小学生..... 22%●中学生..... 30% <p>資料：有元秀文・同研究所総合研究室グループによる調査</p>
---	--

<h3>国語力の崩壊をなげく</h3> <ul style="list-style-type: none">●国語力の低下<ul style="list-style-type: none">●小学校の教師 41%●中高の教師 78% <p>「高学年でも単語でしかはなせない」 「日本語が通じない」 「あまり字が書けない」</p>	<h3>原因は？</h3> <ul style="list-style-type: none">●大人や教師が本を読まなくなった.....39%●教師が厳しい指導をしなくなった.....22%●家庭環境が厳しくなくなった.....19%
---	--

<h3>政府による読書推進</h3> <ul style="list-style-type: none">●「人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことができないもの」●「読書の習慣 子どものうちに」	<h3>子どものうちにつける</h3> <ul style="list-style-type: none">●家庭ですべきこと<ul style="list-style-type: none">●生まれた時からの絵本の読み聞かせ●学校ですべきこと<ul style="list-style-type: none">●本を読む宿題
---	---

子どもに本を読むことは

- 歯磨き・手洗い・お箸の使い方の習慣と同じこと
- 読み方の質

Heathの研究調査より

読み聞かせへの考え方

- 日本の母親の考え方
 - 「あれこれ質問しない」
 - 「絵本を読んだ情感を楽しむ」
- 米国の母親の考え方
 - 「質問の質」
 - 「後の読書へのつながり」
 - 「学校での学習がうまくいく」

加藤 博士論文データ

読み聞かせを始める年齢

- 日本 13.44 ヶ月
- 米国 4.8 ヶ月

加藤 博士論文データ

	日本	米国
ひらがな/ABC	26.28%	78.72%
数の本	16.03%	70.21%
情報	39.74%	81.91%
フィクション	26.92%	84.04%
雑話	74.36%	45.74%

加藤 博士論文データ

	日本	米国
ことば	46.15%	88.30%
読む	19.23%	76.38%
読み書き能力	19.23%	72.34%
話す力	30.77%	70.21%
本への興味	15.38%	73.40%

加藤 博士論文データ

米国で推奨している読み方

- 子どもの答えをほめる・はげます
- 子どもの発話を促す
- 子どもの考えをひきだす
- 子どもの興味をひきだす

<p style="text-align: center;">幼稚園でのことばの教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Show (物を見せる) & Tell (話す) ● 子どもの創作ストーリーを先生や親が口述筆記 ● 自分の気持ちをことばで表現 	<p style="text-align: center;">ダイアロジック・リーディング Whitehurst他により提唱</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ことばのモデルの提示 ● 子どもに問いを出す ● 子どもの反応にフィードバックする ● 知的な描写を子どもからひき出す
--	--

<p style="text-align: center;">問いかける</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「これは何？」 ● 「はい・いいえ」で答えられる問い ● 子どもが積極的に絵本読みに参加できるように
--

<「ダイアロジックリーディング」とは何か>

絵本はこどもの言葉の習得を助ける宝箱のようなものである。しかし、大人がどのようにして絵本を読めばこどもの言葉の習得を促すのかは、日本で出版されている読み聞かせの本では紹介されていない。日本で紹介されている読み方は「あれこれ質問せず、こどもと絵本の時間を楽しみましょう」といったアドバイスが多い。もちろん、こどもと絵本を読むことは親子の情愛関係を深めることができるであろう。では、こどもの言葉や表現力を育てる読み聞かせの方法とは何か。

米国では、1980年代以後、絵本場面における親子のやりとりの研究が進められてきた。その流れの中で、Whitehurst 他により「ダイアロジックリーディング」(Dialogic Reading)という絵本の読み方が紹介され、この手法を用いた幼稚園教諭対象のトレーニングが実施され、こどもたちの言語にどのように影響を与えたかが研究発表されている。ここでは、ダイアロジックリーディングという絵本の読み方がどのようなものかを紹介する。なお、園での実施の場合は教諭対象のワークショップを行うことが望ましい。

ダイアロジックリーディングで大人が子どもに尋ねるべき質問の形式は以下の通りである。

-) what questions を尋ねる。何、どこ、などを尋ねる。このタイプの質問は子どもの語彙を増やす。首をふるだけで答えられる yes/no questions をさける。

「　　さんはどこに行くの？」

「これは何？」

-) open-ended questions を尋ねる。what questions は絵本の絵や内容を理解すると答えられる質問だが、答えのない子ども自身が考えて答える答えのない質問を尋ねる。思考力、表現力、想像力を育てる質問である。

「　　さんがこんなことをしたらどうなると思う？」

「　　さんはこんなことをしてもいいの？」

-) 子どもが答えた時にはほめる。これは子どもが自信をもち、積極的に絵本にかかわる姿勢を育てる。

「そうね。　　ね。」

-) 子どもにことばのモデルを示す。子どもの発話は1語で答えるものが多いが、1語で答えた場合には、それを文章にして提示する。

大人：　　「誰の足跡と思う？」

子ども：　「くまさん」

大人：　　「くまさんの足跡かもしれないね」

-) 子どもの発話を発展させる。

大人：　　「この子の名前は何？」

子ども：　「うさこちゃん」

大人：　　「そうね。うさこちゃん。うさぎさんのあかちゃんだからね。」

-) 子どもの興味と関連させる。絵本と現実の世界を結び付ける。

大人：　　「これは何？」

子ども：　「ばった」

大人：　　「そうね。　　くんもばったを探すのが大好きね。」

上記の質問をとりまぜながら、絵本を読んでいくと、子どもが一人で本を読むようになったときに、上記のような質問を自然と考えながら読むようになるであろう。このようなことができるようになると、むずかしい本に出会っても自分で考えながら読むことができ、国語力がつくであろう。

Whitehurst たちは自宅でのこのような読み聞かせを奨励するため、Dialogic Reading のビデオを作成している。まず、教諭をトレーニングし、園の保護者にトレーニングすることをすすめている。現在私の手元にこのビデオはないが、日本語版ビデオの作成の許可をとることは可能と思われる。また、ビデオのみでなく、実際のワークショップの実施が効果的と思われる。

フィールドワーク実施結果の検証

日本で出版されている「絵本の読み方」「読み聞かせ方」によると、「あれこれ質問せず、喜びや満足感を味わいましょう」というものが多い。今回、私が行ったワークショップの内容は、これとは違う「ダイアロジックリーディング」という読み方である。これはアメリカの研究者 Whitehurst 他によって提唱されている「あれこれ質問する」読み方である。この読み方はこどもの語彙の増加や考え、本をどのように読むかという後の読む行為や学習につながるものである。この読み方の指導のため、「こどもの言葉を育てる読み聞かせ」というワークショップを教諭対象に行い、担当クラスで試みてもらった。

まず、教諭対象のワークショップ実施前に、教諭に「絵本を読む理由は何ですか」というアンケート項目に答えてもらった。下表が示すように、多くの教諭が「集中力を養う」、「本好きになるように」、「本の世界を知る」という、本とかがわかることが大切であることを捉えている。しかし、絵本を読む理由に語彙や読み書き能力の発達をとらえておられる方は少ない。

絵本を読む理由は何ですか

	語彙	読み	想像力	読み書き能力	集中力	情愛	話す力	本好き	本の世界を楽しむ	世界を知る	名作を知る
光源寺 6名	1	0	6	1	4	1	0	3	4	1	0
住吉 3名	0	0	0	1	2	0	0	3	2	0	0
合計	1	0	6	2	6	1	0	6	6	1	0

* 対象人数が少数のため、%化することは避けた。

次に、ワークショップそのものが参考になったかというアンケート項目では、教諭全員が参考になったと答えている。

「こどもの言葉を育てる読み聞かせ」ワークショップは参考になりましたか。

	なった	あまりなかった	なかった
光源寺 7名	7	0	0
住吉 4名	4	0	0
合計	11	0	0

* 対象人数が少数のため、%化することは避けた。

また、ダイアロジックリーディングをクラスで試してみようという項目にも、ダイアロジックリーディングが肯定的に捉えられたことが伺える。

ダイアロジックリーディングを試してみようと思いますか。

	はい	いいえ	わからない
光源寺 7名	6	0	1
住吉 4名	4	0	0
合計	11	0	1

* 対象人数が少数のため、%化することは避けた。

どのような点が参考になったか、以下に自由記入してもらった回答を記載しておく。

光源寺幼稚園

- ・子どもたちが絵本に興味をもてる。例えば、質問に答えたり、保育士の言葉がけにより、日常生活などに結び付く。
- ・こどもの語彙力が身に付く読み方だなと思った。
- ・こどもが積極的に本にかかわっている。
- ・絵本を通してこどもの成長がみられる。こどもとともに絵本が楽しめる。
- ・こどもと一緒に絵本を楽しむことができるし、子どもたちが絵本の内容を理解しやすいと思いました。
- ・こどもに問いかけたりしてともに楽しむことの大切さを知りました。今後、保育に役立てたいです。
- ・子どもたちに問いかけたり、考えさせたりすることで言葉数が増えたり、意味を知ったりすることができるということを、今まであまり意識していなかったののでしてみようと思いました。

住吉幼稚園

- ・子どもたちが絵本を見て、どのように感じているのかがわかった。言葉の大切さ、これから大人になっていくまでに、絵本を通してこんなにも多くのことが学べるのだということ。
- ・今まで無意識にしていたこともあるが、あらためて意識して読むことでこどもの言葉を育てるということがわかった。
- ・ダイアロジックリーディングには、向く絵本と向かない絵本があることがわかった。
- ・今まであまりしたことがなかったので、難しく感じることもありましたが、けれども、「語彙を増やす」ことや「言葉を獲得」するという点で、とても有効な点があると思います。毎回ではないですが(素直に読むことも好きなので)取り組んでいきたいと思いました。

クラスでダイアロジックリーディングを試された教諭の感想は次のような結果である。

ダイアロジックリーディングを試された教諭の感想

	光源寺 4名	住吉 3名	合計 7名
楽しく読めた	3	0	3
理解語彙の確認ができた	3	3	6
こどもが積極的だった	2	3	5
質問を考えるのはむずかしい	0	1	1
質問せずに絵本を楽しみたい	1	1	2

* 対象人数が少数のため、%化することは避けた。

以上教諭の感想からの検証を行ったが、以下にワークショップ前後で行った教諭の読み聞かせをビデオ収録し、その違いについて行った教諭対象のワークショップ内容を検証としてまとめておく。ワークショップ前は教諭がこどもたちにあまり問いかけることもなく、アイコンタクトをとりつつ絵本を読んでいた。こどもは集中してお話を聞いていた。ワークショップ後のダイアロジックリーディングでは以下のような変化が見られた。重複する質問は省略し、ダイアロジックリーディングの特色を表すものを以下にあげておく。

光源寺幼稚園うみぐみ(5歳児クラス 絵本「もりのドギマギ」)



こどもの記憶を問う質問 「この子誰だった？」という主人公の名前を問う。

こども自身が登場人物の絵に書かれている台詞を読むという積極性を見せた。文字をすでに知っていることが確認できる。

こどもの語彙を問う質問 「2万年前ってどれくらい前」というこどもの語彙を問うと、こどもは「ずっとずっとずっと前」と答えていた。これはその言葉を知っているにとどまらず、ある言葉を自分の言葉で説明できるという言語能力を示すものである。



Before & After 5



文字を問う／お話の展開の予測

Before & After 6



子どもが自身で文字を読む

お話の展開を子どもが予測する。怪獣が「ガオウ」と叫ぶというところで教諭がとまり、子どもが「ガオウ」と言うのを待つ。これはお話の展開を予測するものであり、読む力を育てる上で必要な能力といえる。

Before & After 7



子どもが自ら絵についての
コメントをする

Before & After 8



絵に子どもたちが積極的に関わる
舞踏会ということば

子ども自ら「舞踏会で踊っているみたい」と絵を描写する。何かに例えることができる能力を示すものである。また、舞踏会ということは日常会話で使う言葉ではないが、この子どもは舞踏会という言葉を何かの絵本で学んだ可能性を示している。

Before & After 9



語彙のチェック

Before & After 10



お話の結末を絵で確認

語彙のチェック「炎って知ってる？」という問いに対し、「火のこと」と違う言葉で子どもが説明している。絵の比較を問う「さっきの森とどう」という前のページの森との比較を行い描写させる質問である。違いを言葉で表現できることも、子どもの言語能力を示すものである。



最初と最後のお話の内容をページをもどってチェックしていた。これも、こどもたちが獲得すべき読む能力である。前に戻って確認をすることは大人が本を読んでも行うことである。





住吉幼稚園あおぐみ(5歳児クラス 絵本「きんいろあらし」)



こどもの生活に関連する質問「この木知ってる？園のお庭にもあるんだけどな」は、「やなぎ」とこどもの生活体験を結び付ける質問であった。絵本の世界が現実の世界と関連していることを示すものである。



こどもの記憶を問う「ミントって知ってる」という質問。「知らん／知ってる」というこどもの反応を受けて「園にもあるんだけど」と、こどもの生活と結び付けている。

<p style="text-align: center;"><i>Before & After 5</i></p>  <p style="text-align: center;">前のページに戻ってありのおうちの確認 お話の展開の予測</p>	<p style="text-align: center;"><i>Before & After 6</i></p>  <p style="text-align: center;">子ども自身の体験と関連づける レーベリング</p>
<p style="text-align: center;"><i>Before & After 7</i></p>  <p style="text-align: center;">お話の展開の予測 ○○するとどうになってしまう →子どもの考えを引き出す</p>	<p style="text-align: center;"><i>Before & After 8</i></p>  <p style="text-align: center;">絵に子どもたちが積極的に関わる 子どもが知っていることば</p>

「せかせかさんはどうするんやった？」というお話の展開の予測。お話がどう展開していくか予測をたてられることも、こどもの読みの発達では必要な能力である。

「○○するとどうになってしまう？」という質問はこどもの考えを引き出す質問である。

<p style="text-align: center;"><i>Before & After 9</i></p>  <p style="text-align: center;">語彙のチェック 子どもの知っていることと関連づける</p>	<p style="text-align: center;"><i>Before & After 10</i></p>  <p style="text-align: center;">絵からストーリーの内容を確認</p>
---	--

「このお花なんていうお花か知ってる？園にも咲いていたんだけどな」と、こどもの知識を問う質問に「ろてん花(彼岸花のこと)」とこどもは答えたが、このこどもはこの花のことを知っている可能性が高い。さらに興味深い出来事は、私が3回目のフィールドワークでこどもと作成した絵本の読み聞かせを終えたとき、同じこどもが何の脈絡もなく「彼岸花」と私たちに向かってつぶやいた。これは、絵本のときにいた私を見て、自分が前回まちがえた花の名前を「自分はもう覚えたよ」ということを示しているように思えた。

住吉幼稚園あかぐみ(4歳児クラス 絵本「どうぞのいす」)

<p>Before & After 1</p>  <p>子どもに推測させる質問</p>	<p>Before & After 2</p>  <p>子どもに文字を読ませる 子どもに推測させる</p>
--	---

「これがついていたらうさぎさんがつくったというしになるのかな」という質問はこどもに推測させる問いである。

<p>Before & After 3</p>  <p>絵の描写</p>	<p>Before & After 4</p>  <p>前のページにもどって確認</p>
--	---

<p>Before & After 5</p>  <p>お話の中のキャラクターの気持ちを確認</p>	<p>Before & After 6</p>  <p>お話の展開を予測/確認</p>
---	---

Before & After 7



絵の描写／理由の説明

Before & After 8



子どもの体験と関連づける

Before & After 9



子どもの記憶を問う
最初のほうに戻る

Before & After 10



子どもの体験と関連づける

「空っぽにならないようにおいてくれる。みんなやさしいね」という絵本の中のキャラクターの気持ちを確認するコメントは、絵本を読みながら登場人物の内面を考えさせるものである。

Before & After 11



子どもにお話の終わりを考えさせる

「もうばさんもおうちに帰ったのかな」とお話の終わりを考えさせる質問である。

2) 保護者対象ワークショップ

プログラム実施のポイント

対象：こどもの年齢に制限なし

光源寺幼稚園 2008年10月27日(水) 13:30-14:30 参加人数 16名

住吉幼稚園 2008年11月13日(木) 13:30-14:30 参加人数 25名

目的：「ダイアロジックリーディング」を用いて、こどもの語彙や考えを引き出す読み聞かせの方法を指導する

ワークショップの概要

保護者対象の「こどもの言葉を育てる読み聞かせ」ワークショップを、10月27日に光源寺幼稚園で、11月13日に住吉幼稚園で実施した。

子どもの読書活動

- 活字離れ
- 国語力の低下
- 対話による問題解決能力の低下

活字離れ

- 楽しむ読書をしたことがない児童生徒..... 71%
- 図書館で本を借りたことがない
 - 小学生..... 22%
 - 中学生..... 30%

資料：有元秀文・同研究所総括研究室グループによる調査

国語力の崩壊をなげく

- 国語力の低下
 - 小学校の教師 41%
 - 中高の教師 78%
- 「高学年でも単語でしかはなせない」
- 「日本語が通じない」
- 「あまり字が書けない」

原因は？

- 大人や教師が本を読まなくなった.....39%
- 教師が厳しい指導をしなくなった.....22%
- 家庭環境が厳しくなくなった.....19%

政府による読書推進

- 「人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことができないもの」
- 「読書の習慣 子どものうちに」

子どものうちにつける

- 家庭ですべきこと
 - 生まれた時からの絵本の読み聞かせ
- 学校ですべきこと
 - 本を読む宿題

子どもに本を読むことは

- 歯磨き・手洗い・お箸の使い方の習慣と同じこと
- 読み方の質

Heathの研究調査より

読み聞かせへの考え方

- 日本の母親の考え方
 - 「あれこれ質問しない」
 - 「絵本を読んだ情感を楽しむ」
- 米国の母親の考え方
 - 「質問の質」
 - 「後の読書へのつながり」
 - 「学校での学習がうまくいく」

加藤 博士論文データ

読み聞かせを始める年齢

- 日本 13.44 ヶ月
- 米国 4.8 ヶ月

加藤 博士論文データ

	日本	米国
ひらがな/ABC	26.28%	78.72%
数の本	16.03%	70.21%
情報	39.74%	81.91%
フィクション	26.92%	84.04%
昔話	74.36%	45.74%

加藤 博士論文データ

	日本	米国
ことば	46.15%	88.30%
読む	19.23%	76.38%
読み書き能力	19.23%	72.34%
話す力	30.77%	70.21%
本への興味	15.38%	73.40%

加藤 博士論文データ

米国で推奨している読み方

- 子どもの答えをほめる・はげます
- 子どもの発話を促す
- 子どもの考えをひきだす
- 子どもの興味をひきだす

ダイアロジック・リーディング

Whitehurst他により提唱

- ことばのモデルの提示
- 子どもに問いを出す
- 子どもの反応にフィードバックする
- 知的な描写を子どもからひきだす

問いかける

- 「これは何？」
- 「はい・いいえ」で答えられる問い
- 子どもが積極的に絵本読みに参加できるように

読み聞かせは子どものまわりにいる大人みんなで
取り組みましょう！

フィールドワーク実施結果の検証

各園で保護者対象の「こどもの言葉を育てる読み聞かせ」を行ったが、ワークショップの前に保護者にアンケートをとった。教諭同様、絵本を読む理由に語彙や読み書き能力の発達をとらえておられる方は少ない。

絵本を読む理由は何ですか。(複数回答)

	語彙	読む力	想像力	読み書き能力	集中力	情愛	話す力	本好き	本の世界を楽しむ	世界を知る	名作を知る
光源寺 16名	3 19%	3 19%	10 63%	3 19%	3 19%	8 50%	4 25%	5 31%	8 50%	0 0%	0 0%
住吉 25名	3 12%	0 0%	14 56%	3 12%	4 16%	12 48%	4 16%	16 64%	10 40%	1 4%	0 4%
合計	6 15%	3 7%	24 59%	6 15%	7 17%	20 49%	8 20%	21 51%	18 44%	1 2%	0 2%

ワークショップ後に保護者がダイアログクリーディング及びデモをどのように捉えたかを検証するため、アンケートに答えていただいた。ダイアログクリーディングを肯定的に捉えたことを示している。また、家庭でダイアログクリーディングを試そうと思った保護者も多い。

「こどもの言葉を育てる読み聞かせ」ダイアログクリーディングは参考になりましたか。

	なった	あまりなかった	なかった
光源寺 16名	16 (100%)	0	0
住吉 25名*未記入1名	24 (96%)	0	0
合計	30 (98%)	0	0

ダイアログクリーディングを試そうと思いませんか。

	はい	いいえ	わからない
光源寺 16名*未記入1名	14 (88%)	0	1 (6%)
住吉 25名*未記入1名	22 (96%)	0	2 (8%)
合計	36 (88%)	0	3 (7%)

以下に自由に記入してもらった保護者のコメントをあげておく。

光源寺幼稚園の保護者のコメント

- ・今まで最後までそのまま読んでいたのでこどもの言葉を引き出していくということ。
- ・読む途中でいろんな話を入れること。
- ・読みながらこどもの反応をちょっとかがうということ。
- ・たんに読み聞かせるだけでなく、対話をしながら読むんだ！ということ。世界がどんどん広がって想像力が豊かになる。
- ・会話をしながら本を読む。本の世界と現実の世界をリンクさせて本を読む。
- ・こどもの言葉を引き出すような問いかけ
- ・読みかきの仕方。こどもの思いなどを聞きながら読んであげること。

- ・絵本の効果または効果的な読み方
- ・こどもの考えを引き出したり、興味具合がわかるのでよかったです。
- ・読書は自然に身に付くものでなく、教えてあげないといけないということがわかったこと。
- ・絵本の読みかかせを女の人ばかりがすると、こどもに「本を読むのは女の人」というメッセージを与えてしまうというお話。正にその通りと息子を見て思います。
- ・こどもへの話しかけ、絵本でこどもの言葉を引き出すとか、これからに向けて表現力を養う上で必要。

住吉幼稚園の保護者のコメント

- ・生まれた時からの絵本の読み聞かせ
- ・絵本の読み方
- ・いつも読むだけだったので、今度からはこどもも参加できるようにしていきたいです。
- ・読んでいる際にこどもにいろいろ問いかけをするとよいことが分かりました。
- ・今後実行してみたいです。
- ・ダイアロジックリーディング
- ・こどもを参加させながら読む
- ・今は読んであげたりしていませんが、会話を入れつつ読んであげることで、集中力をもたせることができると分かりました。
- ・時間がたくさんある時は質問したり、ひらがな1文字をこどもの担当にしたりと色々していますが、こどもの経験を重ね合わせて話したことがないのでチャレンジしたいです。
- ・ただ読むだけでなく、質問したり参加させて楽しむことができる。
- ・日々の読み聞かせでいろいろ話ながら聞かせます。質問攻めで答えに戸惑うことが多いですがそれでいいようなので安心しました。
- ・普通に普段やっている内容でした。
- ・読んだ本のことで対話をするという習慣がなかったので、少しそういったことを試してみようと思います。
- ・問いかけをあまりせずに読み聞かせしていたので、これからはもっと質問などをしながら楽しもうと思います。
- ・わりと一方的に読んでいたので、こどもの発話を促すような読み方をしてみようと思いました。
- ・ダイアロジックリーディングというものは初めて知った。
- ・本の読み方、参考になりました。
- ・こどもと一緒にこれから本読みをするときにすごく役立てたいと思います。
- ・今までは一方的に読むだけだったが、質問しながら読むことを教わりました。
- ・忙しいのが先に頭にあってこどもと会話しながら読むことをしてこなかったのが、これからはゆっくり時間をかけて読むようにしたいです。
- ・本の読み聞かせの大切さ
- ・こどもに問いかけながら話してみたいです
- ・以前に図書館の方に聞いた読みかかせの用法と違う点があり、こうでないといけない、ということはないのだと感じました。

「絵本や読みかかせについてもっと知りたいことは何ですか」というアンケート項目には以下のようなコメントが寄せられた。

光源寺幼稚園保護者コメント

- ・こどもにいつ頃まで読ませてあげればよいか。
- ・こどもが読みかきせに集中してくれないときはどうすればよいのでしょうか。
- ・こどもとともに楽しめるよい本を他にも
- ・自分で読ませるより、読んであげることの方が大事なのかなぁと思います。
- ・時期が遅いとかあるのですが、やはり就学前に必要ですね。
- ・あまり興味を示さないこどもへの読み聞かせへの取り組み方について

住吉幼稚園保護者コメント

- ・ページを次々とめくってしまう場合は、どういうふうになれば？ 発達に遅れがみられるこどもの場合は違うやり方でしょうか？
- ・本が好きで色々見たものを絵本に例えて「これは みたい」と言ってくれることがたびたびあり、毎日読んでいてよかったです。
- ・お話を聞いていると、本を読むことは知力がつくのにつながるんだと思いますが、私はあれこれ考えずに絵本を楽しみたいと思いました。

3) 「こどもとつくる絵本」

プログラム実施のポイント

対象：5歳児クラス対象

目的：こどもが絵本に興味をもち、自ら絵本とかかわること。5歳児になると、こどもが文字を認識し始め、保護者も「もう一人で読んでいます」といったコメントを行う。しかし、本当にこどもが絵本の内容を理解しているか、「論語読みの論語知らず」になっていないか見極めが必要である。また、こども自身も、TVゲームやその他の遊びを自由にできる年齢となり、絵本は園で読んでもらうだけという状況になりやすい。そのような状況に刺激を与える意味として、こども自身が製作にかかわる「こどもとつくる絵本」はこどもの興味を絵本に向け、絵本が5歳児でも自分たちの遊び道具のひとつとなりうることを示すことを目的とする。

ワークショップの概要

ステップ	概要	実施日程
1	こどもに自分の好きな物、人物、場所などを絵にかいてもらう。かけた時点で大阪女学院大学・短期大学の学生が、こどもたちにその絵の説明を尋ね、メモを作成した。	光源寺幼稚園 10月15日(水) やま組 12:30-13:30 うみ組 13:30-14:30 住吉幼稚園 10月16日(木) 10:00-11:00
2	大阪女学院大学の学生が、ステップ1でこどもたちがかけた絵をスキャナーで取り込む作業をした。約80枚の絵を5時間でデジタル化した。	

ステップ	概要	実施日程
3	<p>ステップ2でデジタル化した絵をもとに、絵本の筋、構成を考えた。Apple社のMacintoshコンピュータ付属のソフトiPhoto上で、絵を順番にならべ、それぞれの絵にお話をつけていく作業を行った。その際、こどもたちから聞き取った絵の説明をできるだけ尊重し、以下の点に留意した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表紙の絵はお話をよく表現しているものを選んだ。表紙の絵のこどもが1ページ目の本文に登場するようにしている。 ・絵をかいたこどもがそのページの主人公になるようにしている。 ・こどもたちの絵についての説明をできるだけ、お話に組み込んだが、話の展開上、変更したり、創作したりした。ただし、戦争や悪者といった内容は採用していない。 	
4	<p>絵本のゲラ原稿をカラープリンタで印刷し、各園の教諭に内容及びこどもの名前のチェックを依頼した。チェック終了後、Apple社のオンライン上のiPhotoプリントサービスに依頼した。費用は以下の通りである。ページ数によって値段が若干異なる結果となった。発注から3週間前後でハードカバーの絵本が完成した。1冊の絵本のゲラ原稿をカラープリントすると、インクカートリッジ1箱(約5000円)を使うことになる。インク代を考慮すると、ハードカバーで製本されてくる絵本代*は妥当な代金といえる。</p>	
5	<p>完成した絵本はこどもたちのクラスで講師が読み聞かせを行い、ビデオに収録した。こどもたちは自分の絵がいつ出てくるか目をきらきら輝かせながら、自分たちの絵本を楽しんだ。</p>	
6	<p>作品展で展示する際、保護者の感想を聞くため、絵本の横に「こどもとつくる絵本」についての感想を書いてもらった(記入された内容については検証の項をご参照)</p>	

*24ページ 5,040円(内訳 単価3900円 送料900円 消費税240円)

*22ページ 4,830円(内訳 単価3700円 送料900円 消費税230円)

フィールドワーク実施結果の検証

「こどもとつくる絵本」については、こどもたちが自分の絵が絵本に使用されることをよく理解していた。保護者対象のワークショップで園を訪問していた私を見つけたこどもが、絵本ができたかどうかを尋ねてきた。こどもの記憶力にも驚かされたが、自分たちの絵が絵本になることを期待していることを伺わせる。読み聞かせ時には、「自分の絵がいつ出てくるか」「どんなお話か」と集中してお話を聞いていたことが印象的であった。また、この絵本の読み聞かせでもダイアロジックリーディングを試み、ページの主人公になっているこどもとダイアログをもつことができた。住吉幼稚園の教諭によると、「自分たちで絵本のようなものをつくる試みをしていたところに、今回の絵本づくりの話があり、こどもたちは自分たちが作りかけていた絵本(紙に絵や文字をかき、ホッチキスでとめる)に取り組み始めた。今回の絵本づくりがひきがねになったのでは」とコメントがあった。今回の絵本づくりは「こども自らが絵本にかかわる、興味をもつ」ことがねらいだったので、この例から、そのねらいは達成できたといえる。後述するが、時間の制約がなければ、こどもたちと構想をねり、話の展開まで考え、絵を

かくプロジェクトとなれば、さらにこどもの読み書き能力を育てるきっかけとなるであろう。

保護者がこの絵本をどう捉えたかを見るため、作品展会場におかれた絵本の横に自由記入の用紙を設置した。また、教諭には最終ワークショップ時で実施のアンケートにコメントをお願いした。以下のコメントからは、教諭及び保護者がこの取り組みを高く評価したことが伺える。

作品展での保護者のコメント

光源寺幼稚園作品展 2008年11月28日

やま組のコメント

- ・こどもたちの興味をひくようなすばらしい絵本だと思います。できれば購入したいです。
- ・こどもたちの笑顔がうかんでくる感じでよかったです。出版はしないのでしょうか。
- ・ひとり、ひとりの絵が1つのお話になるのはすごいなと思います。年長のよい記念になることでしょう。

うみ組のコメント

- ・こどももとても喜んでおり、素敵な絵本だと思います。
- ・こどもの絵が尊重されて、素敵な1冊でした。
- ・とても思い出の1冊となる絵本作成して下さりありがとうございました。絵本に自分の名前やお友達のお名前がたくさん出てきてとても喜んでおります。楽しい絵本になり嬉しく思っています。
- ・こどもたちの絵が本当の絵本になるなんてすばらしいと思います。こどもたちの一生の思い出になると思います。
- ・親子共々一生の思い出になります。

住吉幼稚園作品展 2008年12月13日

- ・こどもたちの楽しそうな絵が1つの話になり、本になっていてよい経験をさせて頂きありがとうございました。
- ・とてもよくできていて感動しました。
- ・どの絵を誰が描いたのか、よく分かり、とても楽しく、よい本になっていると思います。
- ・幼稚園での一人一人の役割(グループの中での存在)がよくわかり、よい思い出になると思います。
- ・とても楽しい絵本に仕上がっていると思います。こどもたち一人一人の顔がうかんできます。ひとつひとつの絵が上手につながっていて、とても感動しました。
- ・こどもたちの絵がお話になり、絵本になるなんて思いもしなかったので、びっくりしました。絵本に下さったことに感謝しています。本当に感動しました。
- ・すてきな本でびっくりしました。こどもたちの心に残る宝物です。ぜひ、一生の思い出にこどもにプレゼントしてください。
- ・これほど素晴らしい本になるとは思っていませんでした。ぜひ、手元においてこどもたちに読み聞かせてやりたいと思います。
- ・こどもたちが自由にかいた絵がこのようなお話になるってすごいと思います。原画のよさを残しながら、立派な本になったので驚きました。
- ・テーマを決めずにかいた絵がまとまり、ひとつのお話になっており、とても驚きました。こどもたちの作品のよさを残した温かみのあるすてきな本になっていました。
- ・こどもたち一人一人の絵が楽しく見ている方も嬉しいです。絵がストーリーになっていて、本にしてくれた事に感謝します。
- ・立派にできた絵本。こどもたちの思い出のためにぜひ手元にほしいとの声も多くありました。

アンケートに記入された教諭のコメント

光源寺幼稚園

- ・子どもたちの絵が1つの絵本になるという経験をした事がなかったので、はじめは想像がつかないのですが、本当に素晴らしいものができて感動しました。子どもたちも物語の中に自分の名前が出てきたことで、他の絵本とは違った「特別」な本に感じている様でした。早速、「この本欲しい！売ってる？」と聞いてきた子どももいました。内容も子どもたちの生活に密着した内容でよかったです。ありがとうございました。
- ・自分で絵本をつくるということは想像力が必要です。想像力を育てるということは、とても大切なことだと思う。また、つくったことで世界に一つだけしかない絵本だから宝になると思う。
- ・子どもたちがかいた絵が絵本になるということでも嬉しそうでした。自分の絵が本になって楽しいストーリーが付くという思い出になるし、簡単に経験できることではないのでよかったです。
- ・子どもが自ら絵本に取り組めたという経験が今後につながると思います。
- ・完成した絵本を見る子どもたちの表情が輝いていて、とてもよかったです。とてもよい記念になりました。
- ・子どもが絵本に興味をもてるいい機会となったと思う。
- ・普段から絵本の読み聞かせをしているが、このプロジェクトがきっかけで、私自身の絵本の幅や読み聞かせの幅が広がった。子どもと絵本がつくれるのは、子どもたちにとっても思い出になるし、楽しい企画だったと思う。

住吉幼稚園

- ・子どもたちが自由にかいた絵がこのようにひとつのお話になることにおどろいた。
- ・一人、一人、自分のページをうれしそうに見ていた。その子が主人公になるのがとてもよいことだと感じた。
- ・子どものリアクションで意外な言葉が出てきたりして面白かったです。子どもたちもとても楽しそうに見ていたなあと感じました。

(5) 活用したツールの内容とねらい、効果
絵本ダイアリー

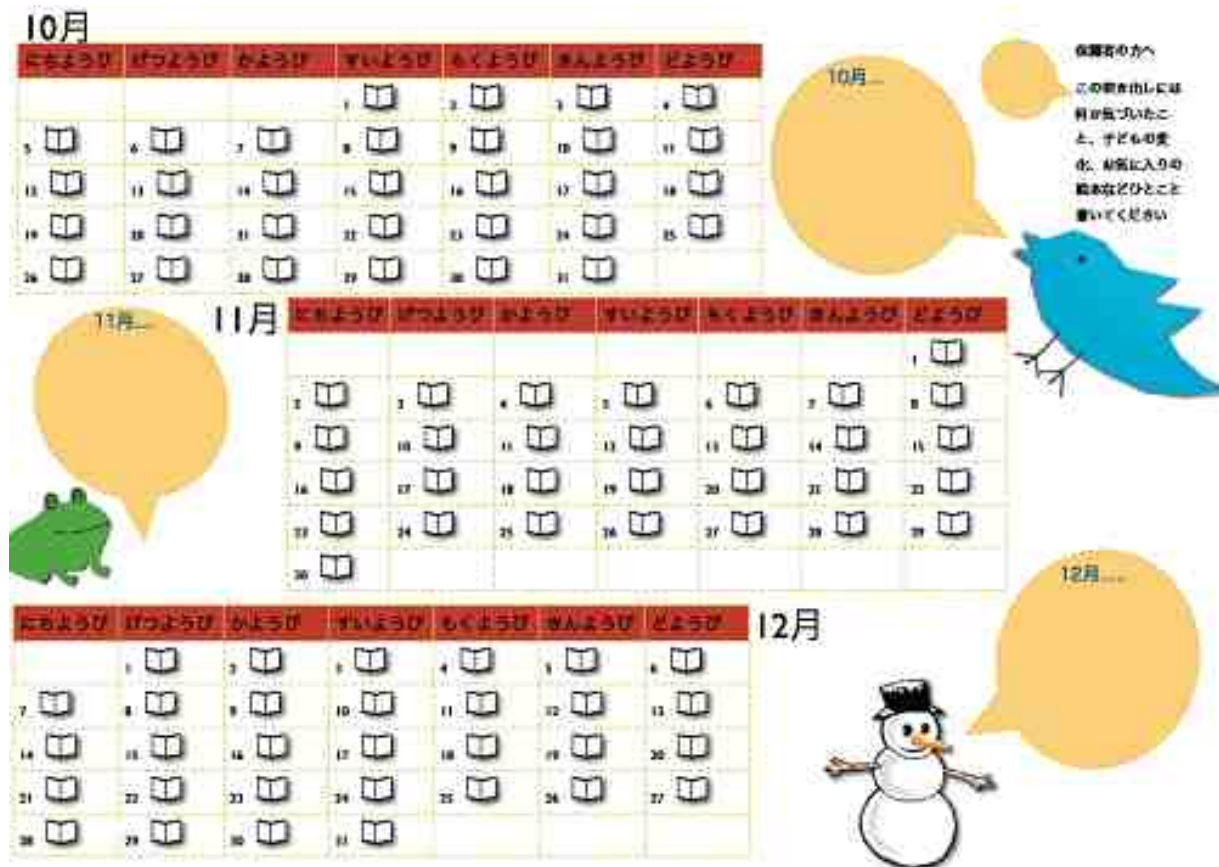


絵本フィールドワーク共通の取り組みとして、指導講師3名で作成した「絵本ダイアリー」と「ニュースレター」を全保護者に配布した。絵本への関心を高め、ご家庭での読み聞かせの動機付けとすること、また、各園での様々な取り組みを紹介し、本事業に参加している園の保護者に本取り組みを知っていただくことを意図した。

ただし、今回の取り組みでは、実施機関ごとに配布の仕方が異なったため、その有効性については議論できない。しかし参考程度に見てみるなら、比較的低年齢児で利用した保護者が多い。

絵本ダイアリーの利用状況

	回答数	利用した	利用していない	利用したが続かなかった	無回答
5歳児の保護者中心の集団	32 100.0%	3 9.4%	15 46.9%	12 37.5%	2 6.2%
3～5歳児の保護者	94 100.0%	18 20.7%	58 66.7%	11 12.6%	7 8.0%
3歳児以下の保護者中心の集団	38 100.0%	3 7.9%	30 78.9%	0 0.0%	5 13.2%
	15 100.0%	14 93.3%	0 0.0%	1 6.7%	0 0.0%



絵本ダイアリーを利用した方の主な意見は以下の通りであった。

- ・絵本を読もうという動機付けになった
- ・コミュニケーションに役立った
- ・絵本の習慣確立に役立った

一方、利用しなかった方、続かなかった方は、「絵本を読む時間がない」「面倒だった」ということが理由になっていた。

利用した方の感想には、次のような記載もみられる。

- ・子どもも読んでほしい本を指さして選ぶようになりました。
- ・もともと絵が好きで絵本を買っていたのですが(子どもがいないときにですが...)、読み聞かせ方ってはじめは分からず、床に広げている子どもの様子を見て一緒に読んでいる感じだったが、色々ヒントをもらったりダイアリーをつける事で、『絵本の時間』として取り組むようになってから、人が絵本でお話する方法に目が行くようになりました。今までは見る側だったのにすごい変化です！！
- ・絵本ダイアリーは絵本を読むことに加え、子どもたちの楽しい習慣になったようです。子どもたちがそんなに喜ぶなら...といつもなら読まない(読めない)日であっても頑張れたような気がします。いいキッカケとなりました。

絵本だより

「絵本だより」については、比較的「読んだ」とする回答が多かった。「取り上げてほしいこと」としては、「絵本の紹介」「読み聞かせについてのアドバイス」いずれも高い要望となっていた。

絵本だよりの利用状況

	回答数	読んだ	読まない	無回答
5歳児の保護者中心の集団	11 100.0%	11 100.0%	0 0.0%	0 0.0%
3～5歳児の保護者	94 100.0%	60 63.8%	25 26.6%	9 9.6%
3歳児以下の保護者中心の集団	15 100.0%	13 86.7%	1 6.7%	1 6.7%



絵本は幼児期における子どものことばの発達に大切な役割を果たします。たとえば、語彙が増えたり、文字を認識できたり、お話の展開を予測したりといったことです。これは小学校に入ってから始まるさまざまな字びと関連があります。文字を読むことは大人にとっても面倒くさいことでもあったり、テレビを見ていれば楽しいと思いがちです。そうなるといっそう本を読むのがおっくうになります。絵本を読むのは子どもたちが喜んでいたり、お箸の使い方を保護者の方が教えるのと同じことです。ぜひ、今期の大阪市就学前児童健康育成プログラム検定に向けた取り組みで絵本が楽しいと家族で思えるものとしてみましょう！私たち3人が以下のような絵本やお話を子どもたちと楽しむ時間を作ります。今後も絵本だよりで取り組みを紹介していきます。

鶴島乳児保育センターと茨田原1保育園での取り組み

私は絵本に興味を持てなかったり、絵本をあまり見ない子ども達に、絵本との楽しい出会いが創れたらと考えています。絵が飛び出したり、絵が動いたり、いろいろな音が飛び出す絵本の不思議ワールドをお互に楽しみ、絵本好きの子ども達が一人でも増えることを願っています。

大阪河崎リハビリテーション大学 高瀬聡幸

魔法をひとふり」をおすすめします。絵本やおはなし、語りかけ、歌い、遊ぶ、子育てが少し楽しくなってくる。そんな魔法をためてみませんか。

大阪樟蔭女子大学 神村栞佳



赤川幼稚園とメリーガーデンでの取り組み

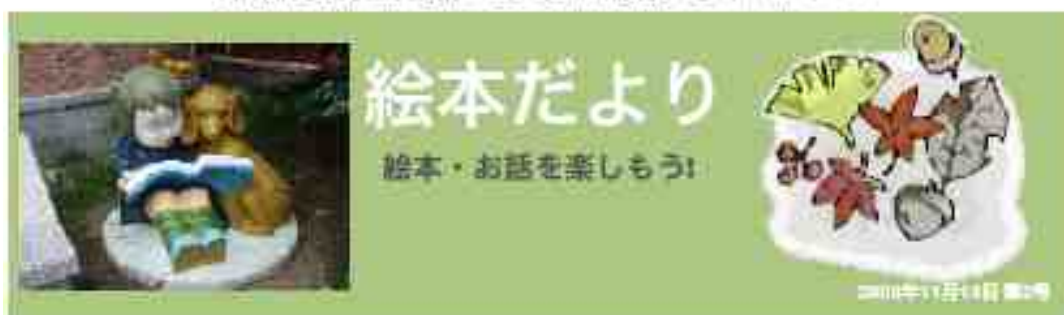


子どもと本との出会いが、わたしのテーマです。子育て支援事業「赤ちゃんと大人のための遊び場」を運営した経験から、「子育てに

住吉幼稚園と光聖寺幼稚園での取り組み

子どものことばを育てる取り組みをします。ひとつは園の先生方、保護者の方を対象とした絵本の読み方のワークショップです。もうひとつは子どもたちと一緒に作る絵本です。できあがった絵本を子どもたちと一緒に読みたいと思います。このような取り組みをとおして子どもたちのことばが育まれていくことでしょう。

大阪女学院大学 加藤映子



すっかり秋になりました。秋は園でも運動会、遠足、作品展と行事がたくさんありますね。「大阪市就学前児童健全育成プログラム策定に向けたフィールドワーク」もそれぞれの園で始まりましました。今回はその内容をご報告します。前号でお知らせしたように、高瀬は「絵本にあまり興味を示さない時どうするか」を指導しました。神村は「子育てに魔法をひとふり」というテーマで取り組みをしています。加藤は「子どもと作る絵本」と「子どものことばを育てる読み聞かせ」のワークショップを保護者及び教諭を対象に行いました。それぞれの取り組みに熱心に参加された保護者の皆様、のびのびと参加してくれた子どもたちと出会えたことは、私たちにとっても大きな喜びでした。今回の絵本だよりでは、3人の取り組みを報告します。

都島乳児保育センターと茨田第1保育所での取り組み

大阪河崎リハビリテーション大学 高瀬敏幸

茨田第1保育所と都島乳児保育センターの第1回目のフィールドワークが終わりました。終わってみれば、あっという間の出来事でした。私のつたない絵本の取り組みに、食い入るように見て下さっていた。子ども達の大きな聲が忘れられません。また手遊びや歌遊びで、とても大きな声で笑ったり、一緒に歌ってくれたりした子ども達の姿に、とても励まされました。第1回目の取り組みを終え、子ども達は絵本や歌が大好きなんだと、私は改めて実感いたしました。子ども達の人数が多く、絵が見えにくかった子どもさんがおられたことを大変申し訳なく思っています。絵本の取り組みが終わり、自然な形で親子が絵本に向かい合う姿が見られたり、子ども達が私のまわりに寄ってきてくれたり、保育室を見学した時に子ども達が大きな声で声かけをして下さり、とても嬉しく思いました。私の取り組みを支えていただいた塾先生方、暖かいまなざしで応援していただいた保護者の皆様方、そして私と一緒に楽しい一時を過ごして

下さった、子ども達に心から感謝を申し上げます。



赤川幼稚園とメリーガーデンでの取り組み

大阪樟蔭女子大学 神村明佳

赤川幼稚園
絵本の表現に気づきながら絵本を読むこと、そして、持ち方、めくり方などの基礎を身につけることを目指して、絵本講座を行っています。「知らなかった」「これまであまり考えたことなかったわ」という先生方の感想に、絵本を見る目が変わりそう……な予感。自信をもって絵本を選び、子どもたちに届けることのできる先生が増えたらうれしいです。



メリーガーデン

わらべうた遊び、絵本、おはなしなどを親子一緒に楽しみ、保護者の方に「言葉で育てる、言葉を育てる」こと

の大切さをお話しています。乳幼児期に、人との関わりの中で、歌やお話を通して、たくさんの言葉に出会い、五感を刺激しながらたっぷり言葉を楽しむこと。これが、子どもの育ち

には不可欠で、子育てに魔法のように効く！のです。



住吉幼稚園と光源寺幼稚園での取り組み

大阪女学院大学 加藤 映子



光源寺幼稚園うみ組の絵本
「だんじりにのって」



光源寺幼稚園やま組の絵本
「うちゅうからのおともだち」



住吉幼稚園あお組の絵本
「みんなでキャンプ」

子どもたちが自ら絵本に関わる、親しみを持つことを目的に「子どもとつくる絵本」を行いました。まず、子どもたちに「自分の好きなもの」を描いてもらいました。絵が完成したところで、大阪女学院の学生がその絵について子どもたちにお話をききました。その絵と子どもたちの説明をもとに、私が文章を考え絵本を作ることができました。子どもたちののびのびとした絵、ほのぼのとした絵、すどい観察が見て取れる絵から、子どもたちの心が見えてきました。この絵本はそれぞれの園の作品展で公開予定ですので、ぜひご覧ください。もうひとつの取り組みは保護者及び教諭を対象とした「子どものことばを育てる読み聞かせ」です。子どもと会話を楽しみながら絵本を読むという「ダイアロジック・リーディング」を伝授しました。参加して下さった保護者の方の多くが「試してみる」といつてくださり、大変嬉しく思いました。また、先生方も教室で実践を始めてくださいました。



「子どもに絵本を貸しても貸してくれない」という悩みを聞きました。以下にファンポイントアドバイスです。

「子どもの見込に、一言一言する必要もないと思います。何よりも大切なのは、読み手、聞き手双方が共に作り出せる空間・時間……それを心ゆくまで楽しむこと。ではないでしょうか（神村）。

「子どもが主体となるように、「これは何？」とか「〇〇はどこにいる？」というような子ども参加型の絵本の読み聞かせを毎日少しずつやってみましょう（山田）。



秋から始まった「大阪市武宇前児童健全育成プログラム策定に向けたフィールドワーク」も今月で終わります。この取り組みに参加してくださった保護者の皆様、子どもたち、先生方に心からお礼を申し上げます。みなさんに出会えたことは大きな喜びでした。絵本だよりも最終号となりました。今回はフィールドワークの報告と、読み聞かせのアドバイス、おすすめ絵本、絵本選びのポイントをお届けします。今後も子どもたちがたくさんの絵本に出会って、健やかに成長していくことをお祈りしています。よいお年をお迎えください！

まずは大人が絵本を楽しみましょう

大阪河崎リハビリテーション大学 高瀬敏幸

絵本を読む時に、私が最も大切にしていることは、絵本の楽しさを子どもに伝えることです。本屋で絵本を購入する時に、「この絵本はおもしろいな」という実感がないと、読み手の気持ちは子どもにうまく伝わりません。絵本の価値基準は、一人一人違います。自分の判断を信頼して、自分が一番絵本に感動したことを伝えるのが一番自然です。子どもに絵本をよむ時間をうんと楽しみましょう。楽しいことは長続きします。上手に読もうと構えないで下さい。自分流の読み方で、十分子どもを楽しませることが出来ます。上手に読もうとすると、読み方がぎこちなくなります。一度絵本の読み手の世界に足を踏み入れることができたなら、後は子どもが後押ししてくれます。子どもはみんな絵本が大好きだからです。忙しい生活の中で、親子の癒しの場が少なくなってきています。絵本の時間が親子の絆を深める大切な時間になることを願っています。

絵本読みが苦手なお母さんへのおすすめ絵本



「サーカスがやってきた」
よぐちたかお作・絵
福音館書店

絵が動くので子どもに大人気。大人も感動します。動画の力が、お母さんの読みを強力にサポートしてくれるのでおすすめの本です

赤川幼稚園とメリーガーデンでの取り組み 大阪樟蔭女子大学 神村朋佳

赤川幼稚園 二回目は実践！ 普段とは違う緊張感や照れを感じつつ、先生同士で絵本を読みあいました。日頃忘れがちな、読んでもらうことの心地よさ、絵本がどう見えるのか、どう届くのか、たくさんの発見がありました。この講座は、基本のキから始めたので、先生方に失礼では……と心配でしたが、経験の振り返り、なんとなくやっていたことの再確認につながりました。

メリーガーデン

二回のプログラムを通じて、非常によい雰囲気、言葉のリズムや抑揚など、言葉を声に出し、耳できく楽しさ、面白さを感じながら、親子でふれあい、絵本やお話に親しむことができました。プログラム終了後も個人的に、色々と質問される姿があり、熱心さが感じられました。



絵本選びのポイント

絵のかわいさ、きれいさだけで選ばない！
 不可解、警告、恐怖がある。絵と言葉で読む。
 視覚的刺激で目を奪わない（音も通じない、想像する余地を奪わない）、耳を引く音声の効果。
 めくりの効果。楽しい言葉と行動の連続で読む物語。
 感情的でないこと。子どもが共感でき、入り込む余地がある。「サリーのどけももつみ」
 対象は年長さんくらいが中心になります。
 読んでみると、子どもの共感が強く感じられる絵本です。



マクロスキー作
杉浦真由

住吉幼稚園と光澤寺幼稚園での取り組み 大阪女学院大学 加藤映子



前号でご紹介した「子どもとつくる絵本」が完成しました。光澤寺幼稚園のうみ組、やま組、住吉幼稚園のおお組で、私が完成した絵本を子どもたちに読みました。「いつ自分の絵がでてくるかな」と目をキラキラさせながら、お話を聞いていた子どもたちが印象的でした。また、作品展で展示した時に保護者の方から次のようなコメントをいただきました。「絵本に自分の名前やお友達のお名前がたくさん出てきてとても喜んでおります。楽しい絵本になり嬉しく思っています。」

ダイアロジックリーディング おすすめ絵本

クリスマスにぜひ読んでほしい絵本は「くりとぐらのおきやくさま」
 (ながかわりえこ やまわきゆりこ 作 吉田節子訳)
 「誰だろう?」「何かな?」「誰の足跡?」など子どもに想像させ、考えさせながら読める楽しい絵本です。



3. 対象年齢別プログラムづくりのポイント

年齢別タイプ別で以下のようなプログラムづくりが考えられる。

乳児から2歳児ぐらい	親子参加型の絵本プログラム
3歳児ぐらい	保護者及び教諭対象の絵本の読み方教室 ・教諭対象のものは研修会のような形で一度に実施が可能であるう。 ・保護者対象はお迎えの時間の前に実施すると参加しやすい。

1) 0・1・2歳児の絵本指導のポイント

0歳児：絵本をオモチャのように扱う時期

おしゃべりをしない時期は、こどもは絵本をおもちゃと同じように扱う。この時期のこどもは、絵本を、ひっぱったり、なめたり、かんだり、破ったりする。偶然絵に目を止めたり、声を出したり、笑ったり、「何かを発見したよ」と訴えるかのように、はしゃいだりする。こどもと絵本との最初の出会いは、偶然に左右されるが、絵本の中から新しいことを発見する喜びが、絵本への興味を増大させる。この時期の絵本は、ていねいにしっかり描かれているもの、こどもに親しみやすい動物や乗物、食べ物などが描かれているものが、この時期のこどもに適している。

絵が雑なものや、色彩の淡いもの、ただ単にかわいらしく描かれている絵本は好ましくない。絵の背景はなくてもよく、あっても目立たないものがよい。絵の対象が上から、横から、後方からなど方向や視点を変えて描いている絵本もこどもの興味を広げることに役立つ。

1歳児：おしゃべりを始める時期

おしゃべりを始めたばかりの時期のこどもには物語絵本は難しい。物語絵本は、多語文がしゃべれるようになるまで待つ必要がある。おしゃべりを始める時期のこどもは、身のまわりの事物を題材にした絵主体の絵本を好む。その後、絵本の題材は人との関係を描いたもの、物と物の関係を描いたものへと内容が発展する。こうしてこどもたちは、絵本を通して、さらに物をしっかり知り、認識を深めていくことができる。

おしゃべりを始めたばかりのこどもは、しゃべることが楽しくて、「これなあに」を連発して、物の名前を聞きたがる。これに対し、大人が「これは犬よ」「これは猫よ」と教えたり、逆に「これはなあに」とこどもにたずねると、こどもは得意げに答えてくれる。

1歳ごろになっても、絵本に対して興味を示さないこどもに対してはポップアップ（飛び出す）絵本などの仕掛け絵本が有効である。動くものに対しては、多くのこどもが興味を示すからである。ただし、最初はいろいろな場所から飛び出す絵本より、真ん中など1か所から飛び出すシンプルな絵本の方が、こどもが結果を予期しやすいのでよい。

2歳児～：言葉でやりとりすることが楽しくなる時期

言葉でやりとりすることが楽しくなる2歳児以降になると、物語絵本にこどもは興味をもち始める。最初の物語絵本は言葉を大切にした絵本が適している。こどもは快い言葉の響

きに耳を傾けるからである。

この時期のこどもは、まだ自分の知っている言葉の量も、まわりの人の言葉を理解する力も十分ではないので、はっきり、わかりやすい言葉を使用することで、こどもが言葉の意味を実感できるように配慮しなければならない。

また、物語絵本の中に擬音語（雨がザ - ザ -、風がピュー - ピュー - など）、擬態語（うさぎがピョンピョン、象がのっしのっしなど）、擬声語（犬がワンワン、カラスがカ - カ - など）等がよく用いられるが、こういう身のまわりの事物との関連が強い音声をたくさん聞く中で、こどもの想像力が育つ。物語絵本のテーマは、単純なものが最初はよく、また言葉や出来事の繰り返しが多くみられるもの、こどもが日常よく接する物やテーマが題材に使われているものが適している。物語絵本は、あまり現実的すぎるものはよくないと言われる。理由はこどもの想像力を規制してしまうからである。想像力を引き出すためには、人物や動物のしぐさや表情、行動が豊かに表現されていることが重要である。物語絵本は大人が静かに読み聞かせる絵本である。大人に抱かれて、絵本の物語を聞き、絵を見ながら黙って大人の語り口調（心地よいリズム）に耳を傾ける体験は、豊かな心を育てるためにも大切なことだと言える。

0・1・2歳児の時期の絵本選びのポイント

絵本は、こどもの年齢（発達）に合ったものを選ぶ。選び方のポイントは以下の通りである。

<飛び出し絵本>

絵に興味を示さないこどもに有効である。

* いろんな所に仕掛けがあると、かえってこどもは集中しにくい。

いつも真ん中から絵が飛び出すなど、次に起こることが予測しやすい絵本が最初はよい。

絵本の実例

「のぞいているのはだあれ？」 キース・モアピーク 作 きたむら まさお 訳

(大日本絵画)

* 真ん中から絵が飛び出す絵本である。

<絵だけの絵本>

絵がきれいで、ていねいに描かれているものを選ぶ。背景と図が明確になっていて、スッキリした絵の絵本がよい。背景がごちゃごちゃしていたり、1枚のページにたくさんのものが描かれたりしている絵本は、最初は避けるのが望ましい。

絵本の実例

「どうぶつのおやこ」 藪内正幸 絵(福音館)

「じどうしゃ」 寺島龍一 絵(福音館)

<物語絵本>

) はじめて物語絵本を与えるときは、同じパターンの言葉のやりとりが繰り返され、擬音がたくさん出てくる絵本がこどもに理解されやすい。

絵本の実例

「ノントンあわぶくぶくぶぶぶう」 キヨノサチコ 作・絵(偕成社)

*他にもたくさんのノントンシリーズが出ている。擬音がいっぱいあった絵本である。

) 物語絵本の初期には、簡単なストーリーで絵がわかりやすい絵本が好ましい。

絵本の実例

「ぞうくんのさんぽ」 なかのひろたか 作・絵(福音館)

*ページ毎に絵が変わり、こどもの期待をふくらませることができる絵本は、4～5歳児に適した絵本である。短く、繰り返しのある物語絵本が充分楽しめるようになった後に、起承転結があり、物語の変化に富んだものを与えるとよい。

2) 言葉で育てる指導のポイント

乳幼児対象のプログラムとしては、言葉の育ちの過程を踏まえ、伝承のわらべ歌遊びや絵本などを組み合わせて、親子でふれあいながら楽しむプログラムを実施することで、絵本に特別関心をもたない養育者に対する働きかけ、絵本の選び方や楽しみ方も含めた提案、言葉を育てること、絵本を取り入れることの動機付けにつながると考えられる。

幼児対象には、幼児だけ、親子対象を問わず、継続して、様々な絵本と出会い、絵本を楽しむ場やプログラムを提供することが望ましいが、保育園、幼稚園等に入るこどもたちがほとんどであると考えられるため、職員に対する研修により、絵本に対する理解を深め、絵本の読み聞かせのスキルを高めることが必要である。

また、アンケート調査で、絵本の紹介や選び方などの情報提供を求める声が少なからず見られたため、養育者には、動機付けのためのツール、継続的な情報提供や何らかの働きかけが有効であろうと思われる。

アンケート結果から、地域子育て支援センターを利用する在宅の乳幼児に関しては、絵本ダイアリーのようなツールがかなり有効であったが、幼稚園の場合は、絵本はすでによく読んでいたので必要ないといった回答も見られ、早い段階で絵本への動機付けがなされることが重要である。

こどもの年齢があがるにつれ、きょうだいの有無や、絵本に対する意識の差、養育者の就労状況といった個々の家庭状況により、家庭での絵本の読み聞かせの取り組みに差が出てくるため、幼稚園などでは、一律に、絵本への動機付けを高めるというよりは、先生を通じた個別の対応(こどもの状況に応じて、絵本を貸し出す、紹介する、養育者に働きかけるなど)、多様な情報提供が必要になるのではないか。

対象年齢別のプログラムづくりのポイント: 0歳児

「ファーストブック」としては、従来、物の絵本(「ものづくし」)が用いられてきた。(りんごの絵に「りんご」というように、物と名称が関連付けられた絵本。)しかし、現在では、ブックスタート事業の対象となる3～4か月児からと、「はじめて」が早まり、物の絵本の前段階の絵本が必要となっている。

そのひとつとして「音の絵本」がある。擬声語、擬態語は、人間が物をどうとらえているかを表現し、イメージとして伝えるため、乳幼児にとっては重要な情報源である。また、音声の心地よさ、語感を楽しみ、自ら音声を発する動機付けとしても有意義である。

その他の留意点として、この時期は、言葉の繰り返しのリズム、パターンが重要であるので、声に出して読んでみて、心地よいかどうか、二場面の繰り返しが構成されているもの（いないいないばあ）など、乳児の認識しやすい構造になっているかどうか、また、絵はシンプルであること、デフォルメしすぎず、きちんとしたデッサンで描かれていること、色の濃淡、明暗の差なども含め、何が描かれているかがはっきり認識しやすいことなどがあげられる。大人から見てのかわいらしさではなく、乳幼児にとっての見えやすさで選ぶことが重要である。

「おっぱい」「ちゅっちゅ」「だっこ」などの語を多用すればあかちゃん絵本になるかのような安易なつくりの絵本、また、体裁は幼児向けのようにも、内容的には幼児には理解できない大人向けの絵本も多数出回っているため、注意を要する。乳幼児の場合は、反応がはっきりしているのも、機嫌のよいときに読み聞かせてみて、反応を見てから購入するとよい。

乳幼児期は、同じ対象を一緒に見るというコミュニケーションの場をつくるために絵本を活用することから始めたい。絵本の扱い方、絵本とのかかわりを少しずつ学ぶ時期と考えて、家庭に絵本があるという状況をつくり、少しずつ触れさせたい。

『ごぶごぶ ごぼごぼ』	駒形克己さく	福音館書店(0.1.2 えほん)
『ころころころ』	元永定正さく	福音館書店
『もこ もこもこ』	元永定正絵、谷川俊太郎文	文研出版
『ごろごろにやーん』	長新太	福音館書店
『じゃあじゃあびりびり』	まついのりこ	偕成社
『にゅーっ するするする』	長 新太	福音館書店(幼児絵本)
『くだもの』	平山 和子	福音館書店(幼児絵本)
『やさい』	平山和子さく	福音館書店(幼児絵本)
『どうぶつのおやこ』	藪内 正幸	福音館書店
『もう おきるかな?』	まつのまさこぶん、やぶうちまさゆきえ	福音館書店(0.1.2 えほん)
『ねんね』	さえぐさ ひろこ	アリス館
『たまごのあかちゃん』	神沢利子文、柳生弦一郎絵	福音館書店
『でてこい でてこい』	はやしあきこ作	福音館書店(0.1.2 えほん)
『いないいないばあ』 (松谷みよ子あかちゃんの本)	松谷 みよ子、瀬川 康男	童心社

対象年齢別のプログラムづくりのポイント: 1歳～2, 3歳

1歳前後は、指差しをし、絵本を見ながら、様々な反応を見せ、おしゃべりをする時期である。こどもの反応に合わせて、「何かな」「だね」などと、答えたり、話したりすることで、絵本の楽しみが広がる時期である。絵本をコミュニケーションの場として、どんどん声かけ、言葉のやりとりを楽しみたい。

また、1歳前後から、数場面のつながりだけでなく、全体として、一つながりのお話が理解

できるようになり、こどもたちが共感しやすい、身近な素材やテーマの絵本や、単純な物語を楽しめるようになる。

こどもはどんどん前進するのではなく、何度も行きつ戻りつしながら進んでいくため、あかちゃん絵本はもうおしまいではなく、新しいものにチャレンジしながら、少しずつ多様なものに出会って行くようサポートが必要である。また、もう一回、もう一回が続く限り、何度でも繰り返し読み聞かせることも必要である。

下記リストは、あかちゃん絵本から、次の段階へとつなぐ絵本をあげた。次に、『ぐりとぐら』や『しょうぼうじどうしゃじぷた』など、少し長い話の絵本も楽しめるようになってくれば、その先は図書館や幼稚園、保育所などを利用しながら、どんどん絵本の世界を広げていける。

あかちゃん絵本から物語を楽しむ絵本へ

『したく』	ヘレン・オクセンバリー	文化出版局
『ブルドーザとなかまたち』	山本忠敬	福音館書店
『のせてのせて』(松谷みよ子あかちゃんの本)	松谷 みよ子、東光寺啓	童心社
『おつきさまこんばんは』(あかちゃんの絵本)	林 明子	福音館書店
『チューチューこいぬ』(長新太の赤ちゃん絵本)	長 新太	ブックローン出版
『こぐまちゃんとぼーる』	わかやま けん、森 比左志、わた よしおみ	こぐま社
『しろくまちゃんのほっとけーき』	わかやまけん 作	こぐま社
『おでかけのまえに』	筒井頼子さく、林明子え	福音館書店
『おりがみいちまい』	ひぐちみちこ	こぐま社

対象年齢別のプログラムづくりのポイント: 3歳～5歳

絵本の世界を存分に楽しめる時期であり、乳幼児期からの積み重ねがあれば、少しずつ、自分で絵本を選べるようになる。この頃になると、かなり、長いものが楽しめるようになるため、養育者にとっては、読み聞かせの継続が負担になってくる場合もあるが、読み聞かせは決してやめなくて、耳からの言葉の入力を増やしていくことが重要である。

読書は積み重ねが大切なので、絵本が好きではない、落ち着いて読めないという場合は、前の段階に戻って、ゆっくりこどものペースに付き合っ進めていきたい。

こどもの世界がぐんと広がり、生活体験も増え、様々なものに興味をもつ時期である。こどもの生活は不思議や驚き、謎や発見に満ちている。こどもの欲求を満たす絵本を探してみよう。昆虫や恐竜の本、乗り物の本を好むのは男児だけではないので、固定観念に縛られず、試してみたい。世界各国の昔話の壮大な世界、奇想天外な面白さも4、5歳くらいから十分に楽しめるようになる。

母親が絵本を選ぶという場合に、どうしても、かわいらしいお話、身近なたわいなお話に偏ることも多いと思われるが、父親が選ぶ、こども自身に選ばせる、図書館や幼稚園などで借りるなどして、様々な絵本やお話に出会わせたい。こども自身の好みがはっきりしていて、乗り物の本しか読まないといった場合、図鑑的な本だけでなく、乗り物を主人公にした物語や、旅をする本など、好きな絵本をベースにしながら、少し角度を変えたセレクトで幅を広げるな

ど工夫したい。

読み聞かせは、少なくとも小学校低学年の間は、続けることが望ましい。小学校低学年の読書力では、こどもが楽しめる（楽しみたい）本と、自分の力で読める本との間には、まだまだギャップがあり、その時期に、読めないと感じたり、読むことが大変だと感じたりすると、読書から離れることにつながる。

自分では読めない（それだけ長く複雑さ、面白さ、満足度が高い）本を存分に楽しむ体験を重ねながら、本への親しみや、もっと読みたい、あれも読みたいという気持ちを持続させること、耳からの読書で語彙を増やし、読む力を蓄えることが必要である。

小学生の読書において、大人と一緒に図書館や本屋に行くことがよい影響を及ぼすこと、また、語彙力と読書力の相関関係が指摘されていることを付け加えておきたい。

科学、知識の絵本、詩、言葉遊び、様々な国の昔話など、幅広い本と出会うこと。よい本には、大人にとってさえ、発見や驚きがある。

知識の本

『アリからみると』	桑原隆一、栗林慧	福音館書店
『ダンゴムシ』（やあ！出会えたね）	今森光彦	アリス館
『ふゆめがっしょうだん』	長新太ほか	福音館書店

伝説・昔話

『魔法のことば』	金関寿夫（訳）、柚木沙弥郎（絵）	福音館書店
『アフリカの音』	沢田としき	講談社
『マウイたいようをつかまえる』	ゴセージ	偕成社

詩・言葉遊び

『これはのみのぴこ』	谷川俊太郎文、和田誠絵	サンリード
------------	-------------	-------

昔話を読んであげること。

『きんのがちょうのほん 四つのむかしばなし』（福音館書店）、『世界のはじまり』メイヨー（岩波書店）、『日本の昔話』（福音館書店）、『語るためのグリム童話』（小峰書店）、『子どもに語るの昔話』シリーズ（こぐま社）など。

お話を読んであげること。

『おおきなおおきなおいも』、『がまくんとかえるくん』シリーズ、『エルマーのぼうけん』シリーズ、『おいしいのぼうけん』『いやいやえん』などからはじめて少しずつ、繰り返し。

3) 言葉を育てる時期

保護者及び教諭対象のワークショップでは、ダイアロジックリーディングの手法に興味をもっていただいた。ただし、ワークショップでは、ダイアロジックリーディングだけが唯一の読み聞かせ方法ではないこと、絵本によってはその文章のリズム等の感性を味わうものがあることを理解する必要があることは述べたが、プログラムづくりではさらに整理をしておく必要がある。

絵本の文章にこめられた音やリズムを楽しむ絵本は、ダイアロジックリーディングには向かない。「どこに がいる」「これは誰」「誰がくるのかな」「何になるんだろう」といった質問が出しやすい絵本が向いている。自然と子どもと対話できるような絵本が向いている。ただし、無理矢理質問をつくる必要はない。

ダイアロジックリーディングを行わずとも、最後に「この絵本おもしろかった?」「好き?」「どんなところがおもしろかった?」とひとこと尋ねることも、子どもの考えを引き出すよい機会になる。

ダイアロジックリーディングにお薦めの絵本を以下に紹介する。なお、自分で読んで判断することが大切である。

「はらべこあおむし」	エリック＝カール さく	偕成社
「ぐりとぐら」シリーズ	中川李枝子さく 大村百合子え	福音館書店
「わたしとあそんで」	マリー・ホール・エッツ ぶん／え	福音館書店
「またもりへ」	マリー・ホール・エッツ ぶん／え	福音館書店
「おおきなかぶ」	話 トルストイ 作・絵 ニーアム・シャーキー	ブロンズ新社

4) 絵本をつくる

「子どもとつくる絵本」では友達が花をかき始めると、皆同じ絵をテーマにしてしまい、お話の展開を考える上では難しかった。見学に来られていた、大阪市子ども青少年局の担当者からは以下のような提案をいただいた。遠足や行事の後に、子どもたちと絵本をつくる。そのときに、どんな絵をかくか、どんなお話にするかを子どもたちとともに考えつくっていくことは可能ではないだろうか。この作業を通して、以下のような子どもの発達を促すことができる。子どもたちがストーリーの展開を考えることによる想像力や思考力の発達に繋がる。また、どのような言葉を選ぶかなど、話し言葉から書き言葉への学習となりうる。さらには、絵本を自ら作成することで、絵本や本の世界と積極的にかかわる姿勢を培うことができる。

5) 園での絵本の読み聞かせのルーティン化

教諭対象ワークショップ前に行った読み聞かせについてのアンケート結果から、園での絵本の読み聞かせの状況が伺える。次ページの表は頻度を示すものだが、ほぼ毎日実施されていることがわかる。

読み聞かせの頻度について

	1日に2,3回	1日1回	1週間に1回	1か月に1回
2園合計	5	3	0	1

読む絵本のタイプには、若干の偏りがある。さまざまな絵本のジャンルの絵本をこどもたちに今後提示していく必要がある。

読む絵本のタイプ (複数回答可)

	おとぎ話	ひらがな	数の本	テレビ	名作童話	創作童話	昔話	情報
2園合計	5	3	2	1	0	9	4	5

以上の結果を踏まえて、以下のようなプログラムが考えられる。

- ・毎日読むこと
- ・絵本はさまざまなジャンルを読むこと
- ・絵本は教諭が選んだり、こどもたちが自分の読んでもらいたい絵本を絵本室からもってくる活動を入れること。そのときにはなぜこの絵本を読んでもらいたいのか、こどもの考えや気持ちを引き出すこと。「絵がきれいだから」「この絵本を以前に読んでお友達にも紹介したいから」といったことを表現できるようにしていくこと。年齢が低い場合は保護者とこの活動をするのも可能であろう。これは、自ら自分で本にかかわる行為やその後の図書館や学校の図書室の利用を促進することが期待できる。

6) 養育者支援のポイント

「絵本だより」「絵本ダイアリー」の活用

保護者対象ワークショップ時に実施したアンケートで、家庭での読み聞かせの頻度を示すものである。1日1回読んでいるという家庭は5割弱である。この頻度をあげるために、前述のワークショップの他に、「絵本だより」や「絵本ダイアリー」のツールを活用して、保護者を支援していく。ただし、教諭がその意義を説明し、保護者に利用を促すことが必要である。

保護者アンケート 読み聞かせの頻度について

	1日に2,3回	1日1回	1週間に1回	1か月に1回	その他
光源寺 16名	1 (6%)	5 (31%)	4 (25%)	3 (19%)	3 (19%)
住吉 25名	0 (0%)	14 (56%)	8 (32%)	0 (0%)	1 (4%)
合計 41名	1 (2%)	19 (46%)	12 (27%)	3 (10%)	4 (10%)

ツールとして使用した「絵本ダイアリー」は年齢の低いグループで、「動機付けになった」「習慣付けになった」という評価が出たが、5歳児クラスではそういう捉え方はされにくいようである。5歳児の場合、下に弟妹がいる可能性があり、保護者に時間的な余裕がないという理由も考えられる。

プログラムづくりでは、年齢の異なるグループの検証も踏まえて、検討する必要がある。また、「絵本だより」については、「アドバイス」や「絵本の紹介」を保護者は望んでいるし、絵本の読み聞かせの啓蒙活動のツールとなりうることが示唆された。

絵本の紹介

家庭で読む絵本のタイプは、教諭に比べ、ジャンルのバラエティーが多いのがわかる。「絵本だより」で毎回違うタイプの絵本の紹介を行うことも、家庭での絵本の読み聞かせ啓発活動になるであろう。

読む絵本のタイプ (複数回答可)

	おとぎ話	ひらがな	数の本	テレビ	名作童話	創作童話	昔話	情報
光源寺 16名	8 (50%)	5 (31%)	6 (38%)	6 (38%)	7 (44%)	8 (50%)	9 (56%)	6 (38%)
住吉 25名	16 (64%)	4 (16%)	2 (8%)	12 (48%)	11 (44%)	17 (68%)	8 (32%)	8 (32%)
合計 41名	24 (59%)	9 (22%)	8 (20%)	18 (44%)	18 (44%)	25 (61%)	17 (41%)	14 (41%)

養育者が絵本を読む際のポイント

養育者が絵本を読む際のポイントとして、一般に次の3点をおさえない。

）楽しんで読む。

楽しいことは長続きする。

）上手に読もうと構えない。

上手に読もうとすると、読み方がぎこちなくなる。自然な読み方の方が、読み手の気持ちは伝わりやすくなる。

）自分流の読み方でよい。

絵本の読み方は人それぞれで、決まった読み方はない。自分がよいと思う読み方で読めばよい。

乳幼児～2、3歳児をもつ養育者のために

生後3、4か月の時期にブックスタート事業が実施され、絵本と出会う時期は早まっている。メリーガーデン保育園でのアンケート結果によると、ブックスタートを体験された養育者の受け止め方は、非常に肯定的であった。しかし、在宅児については、その後、就園までの間、サポートが手薄となりがちである。そこで、その間のサポートとして、未就園の親子を対象としたプログラムが必要であり、有効である。

あかちゃん～2、3歳児を対象とする絵本は、言葉の量が少なく、語彙が限られており、擬音語などが多用される。そのため、大人は、どう読めばいいのか、何が楽しいのか、どういう意味なのかと、とまどうところがあることがアンケート結果からうかがえる。

こどもが幼い間は、文字は、楽譜のように、音声化されるための指標に過ぎない。文字を黙読することに慣れている大人にとって、音声にのせること、耳できくこと、声に出したときの

リズムや口調のよさ、語感などを、幼児とともに楽しめるか否かが重要である。また、絵本のよしあしを考える際にもこのことは重要なポイントとなる。

そこで、乳幼児向けの絵本については、絵本の紹介などの単なる情報提供にとどまらず、実際に読み聞かせを行い、そこから、どのような言葉かけや、遊びが生まれるのか、乳幼児にとって、なぜ、楽しいのか、どんな意味があるのかを伝えていくべきであろう。

乳幼児期の絵本は、知育以前に、コミュニケーションの場をつくり、言葉かけ、ものや言葉のやりとりを増やすことに有効である。言葉の育ちの基盤づくりであり、同時に、親子の愛着形成の場でもある。読まなければというプレッシャーを与えるのではなく、親子で楽しむことを主眼とした活動としたい。

日々の絵本とのかかわりを重ねていくことで、じっと座って見る、話を聞くことが、徐々にできるようになっていくが、それには、相当の時間を要すること、繰り返しの大切さを、養育者に十分に伝えながら、継続的にサポートしていくことが必要である。また、絵本以前の、顔を見る、声や言葉を意識する、まねをする、やりとりをするなどが、言葉の育ちの上で重要なものであることを十分伝えたい。愛着形成、親子共々の精神面の安定を促進することが、コミュニケーションにつながり、絵本の理解を促し、絵本の楽しみをも増幅させる。乳幼児とのコミュニケーションの方法を知り、様々な遊びなどを取り入れられるようサポートしたい。

絵本ダイアリーのようなツールは、そのようなツールや情報の提供が比較的少ないこと、絵本の読み聞かせがルーティンとなっていないこと、養育者が子育て中心の生活をしていることから、在宅の親子にとっては、有効であると予測される。この時期にルーティンとなると、その後、長く継続されることが予測されるため、特にこの時期に手厚いサポートが必要であろう。

就園児をもつ養育者のために

就園後は、保育所や幼稚園における情報提供、月刊絵本の購入、読み聞かせ、貸し出しなどにより、こどもたちの絵本とのかかわりは、より頻度も増し、多様化すると考えられるが、その質と内容は、各園の蔵書や、保育者の資質、知識といった環境に左右される。そのため、保育者に対する絵本に関する研修の充実が期待される。

一方、園でのサポートが期待できるため、家庭での取り組み、養育者からの働きかけや、養育者のかかわりが減ってしまうことが、この時期の課題となる。乳幼児期に家庭での読み聞かせの習慣付けが行われていることが最も望ましいが、そうでない場合は、かなり積極的に働きかけ、サポートを行っていく必要があるであろう。

3～5歳は、就学後の読み書きの獲得にも影響する重要な時期であり、この時期の言葉の育ちを促進するために、絵本やお話の読み聞かせは有効である。養育者に対するサポートとして、まずは、こどもの言葉の育ちに関する理解を深め、絵本やお話の読み聞かせの意義を伝えていくこと、小学校入学時を境に断絶することのないよう、文字が読めるようになっても、読み聞かせが必要であり、日々の継続が重要であることを伝えていくことが必要である。

3～5歳の時期には、発達段階の差が大きく、絵本が好きなこども、読み聞かせに慣れているこどもとそうでないこどもの差、好みなどの個人差が開いてくるので、個々に、こどもにとって必要な絵本、楽しめる絵本を的確に与えていくべきである。しかし、それは、絵本と、こどもの育ち、個々のこどもの好みや読書歴を熟知していなければ難しい。そこで、多様な絵本

について、内容や、グレード、時期、テーマ、表現方法など、多角的な紹介を行い、養育者が絵本を選び、与える際にヒントとなるような情報提供が必要となる。また、貸し出しを積極的に行うこと、園や図書館などから情報発信をすることで、選んだり、購入したりする手間や負担を軽減しながら、つねに、手近に絵本がある環境をつくること、家庭での取り組みやすさにつながるであろう。

養育者にとっては、忙しい、時間がない、ということが、負担感の一番の要因となっている。絵本の読み聞かせに要するのは5分から10分程度であり、養育者自身にも楽しみ、喜びとなること、それほど難しくも大変でもないことが体験から感じられるような支援が必要である。

すでに読み聞かせがルーティンとなっている家庭にとっては、ダイアリーなどのツールの提供は、時宜を得たものとはいえない。また、就園児の養育者の多くは、仕事をもっている、きょうだいがいるなどの事由があり、ツールが家庭における課題として捉えられると、負担感を増幅したり、プレッシャーを与えたりすることにつながりうる。

以上の点に留意した上で、保育者対象研修、親子対象読み聞かせ体験プログラム、保護者対象研修、ツールの提供など、様々なサポートを組み合わせ、取り入れていくことが望まれる。

